BLACK GAME～精神破壊～

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＡＣＫ　ＧＡＭＥ～精神破壊～

【Ｎコード】
Ｎ０１７３Ｙ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
時は２０１４年。そのとき、爆発的にヒットした一枚のディスクがあった。
黒色をしたディスクは『ＢＬＡＣＫ　ＧＡＭＥ』と名づけられ、今や世界中で数多くのファンを持っていた。
ゲームを開始してからノンストップで進む、超過激、この上なく残酷で残忍。そして、生々しいがまでの映像。全てにおいて、最先端だったゲームに隠された脅威の真実。
世界中で人口爆発が起こり、もはや抱えきれなくなった先進国はつ

いに、最後の手段に手をつけた。
ネット依存、ゲーマーたちを利用しての、驚愕の策。
しかし、そのディスクは世界で一枚しか存在しない。
もし自分が、生身の人間を操っていることを知ったならば。
そのディスクを手にしたものは、大抵、死ぬか・・・精神に異常をきたす。
その大きな重みに耐えられるか――――――・・・現実味を帯びた恐怖が巻き起こす、リアル・ヴァイオレンス・ホラー。

【主題歌】Ｐｒｅｓｅｎｃｅ　（前書き）

テーマソングっぽいのを作ってみました。
音はついてないですけれど・・・
気が向いたら、どなたかリズムやメロディーをつけてやって下さいな。

【主題歌】Presence

作詞　布袋しぐれ
作曲
編曲

まるで冷たい水の中
落ちていくみたいだった
苦しみ
そういう生半可なものじゃなくって
ただ単に
苦しかった

こんな小さな空間に
生きていることを知った
狭い
ちっぽけな存在で
出て行けない
逃げ出せない

助けて　必死のSOS
誰か　私に早く気付いて・・・

This still falls to Hell
救い出されることなく

世の中の波にただ揉まれ
忘れられていく
Ｔｈｅ　ｐａｉｎ　ｏｆ　ｌｏｓｉｎｇ
その感覚がただ怖くて
あなた無しでは
生きていくこと　難しいから
Ｙｏｕ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｄｉｓａｐｐｅａｒ　ｉｎ・・・

ぎゅっと握った掌
一緒に行けると思った
消えないって
けれどそれこそ酷く残酷に
消え果た
摩天楼みたいに

世界の狭さと
生きる意味を疑った
軽い
こんなにヒトの命は軽いの
怖くて
もう抜け出せない

世の中　パズルみたいで
ひとつ　ピースが欠けても代わりがあった

Among the world is too cruel
生きていける
自信なんてないよ
嘘っぱちでいい
So I ask smiling
世界はきっと”変わるはず”
このきらめきを
踏みにじらないで
I just wish one of my

This still falls to Hell
救い出されることなく
世の中の波にただ揉まれ
忘れられていく
The pain of losing
その感覚がただ怖くて
あなた無しでは
生きていくこと 難しいから
You want to disappear in・・・

発売開始（前書き）

本編に登場する、地名等、実在するものと全く関係がありません。

発売開始

２０１４年1月１４日。
世界中で話題のゲームソフトが、ついに日本で発売開始された。
ソフトは真っ黒なカバーに入れられた、真っ黒なディスク。それを専用の機器に接続して、パソコンからプレイする。何かと設定が面倒ではあるが、映像のリアルさ、やり込めるゲームということで。既に、アメリカ、韓国、中国では絶大な人気を得ていた。
それは恐ろしいほどで、ネット依存者の増加に拍車をかけるまでになった。

それと時期を同じくして、ここ数年で、なぜか失踪者が増加していた。正確には、失踪か、誘拐かわかっていないのだが。
東京で失踪届けの出ているだけでも、数百人。福岡に二十三人。愛知に三十四名。かなりの人数が、失踪していた。もう、失踪者の出ていない県はないとまで言われた。
日に何百という単位ですっぽり人が消えたこともあった。
学校がひとつ、ある日突然、廃校になったこともあった。
何かが可笑しい。何かが起きている。世間の裏側で、確かに動く大きな計画が、日本を飲み込もうとしていた。

そして大きな影が、ついにその尻尾を覗かせた。
政府は知らない。隣人さえも知らない。世の中も知らない。あの人にそっくりなキャラクター、プレイヤー。それが、その本人であることを。

２０１４年1月１４日。
ある青年の、プレイ記録とその事件は連動していた。
このゲームは、よくリセットしてしまうことでも有名で、クリアするまで一気にやってしまわないと意味がない。
セーブボタンの存在しない、ミッションゲーム。

＞i３３８０６―２８５２＜

プレイ記録を保持していた、唯一クリアしたその青年は。
２０１４年１１月１４日現在。
精神病棟で、未だに退院できず、隔離病棟で生活している。

運命（前書き）

※登場する専門的用語はあとがきにて、解説しています

運命

部活動の一貫だった。
私は友人の勧めもあり、中学生からライフル射撃を始めた。
夏は暑いし、冬は思うように手が温まらないせいもあって、当らないこともしばしば。引き金を引くのは思うより、難しかったりする。
「はあ・・・また満射逃した・・」
「なんか考え事？」
「え」
「集中してないみたいだったから」
「ああ・・・うん・・・まあね」
「・・・もうすぐお昼ってさ。監督が呼んでるよ。コート脱いだら、来いって」
「はあい・・」
しめって、少し重みの増したコートを脱ぐ。予想以上の汗で、それはとても重くなっていた。
監督が呼ぶだなんて、どうしたんだろう。私、姿勢が可笑しかったかな。少し、考えながら、監督たちの控えている事務室へ赴く。
「監督、泉水です」
「どうぞ」
「何でしょうか」
「うん、ちょっとね。大会に出てもらいたくて。この、中四国大会。成年の部もあるから、岩崎くんも一緒に行ってもらうんだけれど・・どうかな？」
「いつなんですか？」
「一ヵ月後、１４日だ」
「・・・分かりました。参加します」
「そうか」

「はい」
「頑張りなさいよ。射場はこれから、出来るだけ開けておくから・・もしもなんかあったら、顧問の先生を通して、私に伝えなさい」
「はい」
「頑張って」
「ありがとうございます」
おそらく選抜されたんだろう。このときは嬉しくて仕方がなかった。

まだ、事実を知らなかったから。

運命（後書き）

※ライフル射撃・・・口径４．５ｍｍの空気銃を用いて、１０メートル先の１１．２?の標的を狙う競技です。今回の場合、エアと、ビームがごっちゃですが、無視してください。（１０点圏内は１?程度です）

※満射・・・１０点を一シリーズ（１０発連続）で撃つこと。

次（前書き）

主人公は泉水（いずみ）　竜子（たつこ）です。

次

多分、気持ちが浮ついていたんだと思う。あまり落ち着きもなく、そわそわしていた。

だって、今回の大会に選抜されたのだから。しかも私だけ。女子もいっぱいいるし、ライフルだって競技人口が少ないわけじゃない。だから、その嬉しさはひとしおだった。

その、そわそわがいけなかったんだって、気付くには多分――――――・・・ただ単純に遅かったんだと思う。

『今日正午ごろ、また都内の学校から生徒が行方不明になりました。男女合わせて人数は・・・』

相変わらずの、ワイドショーの内容。ここ最近、こんなニュースばっかりだ。面白くもない。殺人が消えたと思ったら、今度は行方不明。最近のブームは分からない。まあ、死に方のブームなんて、知りたくもないけれど。でも、ここ最近の人口の減少は少なからず、それも原因であるといえるだろう。

「ねえ、お母さん」

「何？」

「私、選手に選ばれたよ、今度の大会」

「あら、そうなの・・おめでとう。じゃあ、なにか好きなものを作ってあげるわね」

「じゃあ、グラタンがいいなあ・・マカロニグラタン」

「はいはい。じゃあ、チーズ買ってきてくれる？」

「分かった」

『尚、そのうち、男女6人の遺体が、山中で見つかりました。男女6人とも、京成（けいせい）高校の3年生でした』

「あら、嫌だ・・・竜子（たつこ）も気をつけるのよ」

「はいはい」
――――――多分、注意すべきだったんだと思う。同じ高校の、しかも隣のクラスの子が失踪したなんて事実。あまりにも、非現実的すぎて、どこか痛いほどリアルで。もっと、気をつけておけば、あんなことは怒らなかったんだろうなあ。そう、感じている。

だって、気がつけば、首が痛くって。
開きっぱなしだった窓の外、赤く光るレーザーが見えたのは覚えている。

＞i338816―2852＜

多分、このときだったんだろう。今回のゲームの登場人物が変わったのも。
だって、あの遺体は、プレイ終了のしるし。誰かがクリアしちゃったしるし。その証に、ネットが沸いてる。どのチャットも騒がしい。
『リアル感、半端ない』
『ネ申キタ！』
『これすごい』
『噂以上！』
『５６時間ぶっ通しでクリア★』

ずっと、セーブなしにプレイしつづけるユーザーは数多といる。
その中で、真のエンドを見たものは、まだ確認されていない。

『脱出成功　クリア』

その文字が出る画面は、フェイク。そして、そのディスクもフェイク。
本当に、その空間を操れるディスクは存在している。そして、それは数々のフェイクと共に、店頭に並んでいた。
ただ、本物にはひとつ、特徴がある。

「お、神ゲー」
「傷アリじゃねえか・・」
「でも安いぞ、ほら、キズありってだけで３０００円切り」
「まあ、ん・・そうだけどさ・・」
「プレイできんのなら、なんでもいいしさあ」
「・・好きモンだねえ、お前も」
「流行には乗っとかなくっちゃ」
「ふうん」
本物の、ディスクには、傷が入っている。

未設定のシナリオ

２０１４年６月１４日、午後１０時００分。
ここは、都内の、あるマンションの一室。
昼間、購入した傷だらけの、ディスク。それがパソコンに入れられて、初期画面が映される。真っ黒で、何もない画面。しばらくすると、砂時計がぼうっと、姿を現し、そこからしばらく待たされる。
重たいディスクだ。データ量は半端ないらしい。
そして、『Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ』の文字が、白から赤に変わる頃、画面下を奇妙なキャラクターが動き出す。
おそらくマスコットか、何かだろうか。黄色っぽい顔に、目はただ大きく黒い孔が開いていて、しかも、うっすら赤い。そして、裂けたような口は、赤く、鼻孔も赤い。気持ち悪い。まるで、一時はやった、あのブラック・コメディー映画を思い出すようだ。
そして、そのキャラクターが大きく口を開けたかと思うと、画面に大きく『Ｈｏｗ　Ｐｌａｙ？』の文字が出てくる。本編丸々英語なのだろうと、勝手に覚悟して、英和辞典も用意していたが、説明画面は、普通に日本語だった。
少し、調子抜けるが、まあ、こっちのほうが断然良い。
「よし、やるぞ」
おそらく、このゲーム最大の、犠牲者。被破壊者（プレーヤー）であろう。
『プレーヤー名と、持っていくアイテムを１０個選んでください。最初のステージは、廃墟です』

緑のツタにところどころを、覆われた大きな建物。
風の抜けていく音が、あまりにも静かで、錆びたパイプや、管があまりにも露骨に、時代を感じさせる。

ここはどこなのだろう。
ずきずきする頭を起こして、考える。
服装が変わっていないあたり、多分、私の生身は無事とみなしていいのだろう――――・・・？
周りには誰もおらず、静かに静まり返っている。
「・・・・随分と静かな場所だなあ・・・」
ぼやいた声が、案外、小さく辺りに静かに消えていった。
「・・誰かいるのか？」
「・・・・誰・・・」
どこからともなく。男性の、少し控えめな声がした。聞き覚えのあるような、少し高めな声色。
「・・・・・」
「・・・・泉水(いずみ)さん・・だったよね？」
「・・・はい」
まさか、ここで鉢合わせするなんて思ってもみなかった。あの、先輩だった。ライフル射撃の、随分と昔の先輩で。社会人になっても、未だに射場に練習に来る、先輩。優しいし、教え方も丁寧だし、話しやすかったから。かなり慕われていた先輩だった。
そして、私と一緒に、大会に行くはずだった先輩だ。
「ここ、どこか分からないね・・」
「岩崎(いわさき)先輩も分からないんですか・・」
「うん・・分かんない・・誰かいないのかな・・」
「ここ、廃墟ですかね」
「・・・みたいだね・・多分ね・・俺の記憶が正しければ、ここはセメント工場かなんかだったと思う。新聞で見た記憶があるよ」
「・・・そうですか」
「まあ・・・一緒に出口探そう。どっかは国道につながってるはずだしね」
「・・・・・はい」
「・・・どうかした？」

多分、目が合ってはいけないものと目が合った気がしてならない。
気のせいだろうか。
先輩の背後の、奥、黄色くぼやっと浮かぶ影が見えている。
「先輩・・・後ろ・・・」
ゆっくりと、指差すほうへ、先輩が振り向いた。

迷子

その黄色い影が、段々と、迫ってくるようだった。ぼうっと光っていただけなのに、少しずつ、こちらに迫ってくるのが明らかだった。

「先輩・・・」

「大丈夫・・・」

後ろ手に先輩は、私を庇うように制止した。

あの、黄色い影と、私たちの距離は間違いなく５０ｍはきっている。銃でもあれば、一撃であんなもの倒せるだろう。直線距離を移動しているだけだから。先輩は５０ｍ競技も練習していたはずだから、あんなの一撃だろうに。しかし、生憎とも手元に銃なんてなかった。

「（この子ひとりくらい、守れるはず）」

私の肩に優しく当っていた先輩の、腕に力が入ったように見えた。

「先輩・・・どうしましょう・・」

黄色い影が、段々と速度を上げてきたように見える。もう５０ｍもないんだ。危ない。

「あの太いパイプ、見えるか？」

「・・はい」

ものすごく、恐ろしい剣幕で、先輩が指差した。しかし、パイプなんてここは、たくさんあるし、どれも大きい。私は内心、先輩の指差す、太いパイプが分からなかった。

「あそこまで走れ」

「え」

「俺はどうにかなる。行け」

「先輩・・・」

「走れ！」

怒鳴るように言われたのでは、従うしかない。

私は地面を強く蹴って、近くに見えていた、パイプの後ろまで走

った。裸足だったせいもあって、痛い。足の裏に、砂利とか、細かな砂が摩擦して、痛みが増した。それが、段々、痺れに変わってきた。多分、どっか切れたんだと思う。それでも先輩の命令だったから、ただひたすらに、後ろを向くこともなく走った。

いきなり走った、胸の奥が痛かった。

目の前の黄色い影に脅えているわけではないが。あの黄色い物体は、どうにも気味が悪い。いや、受け入れがたいんだ。あの風貌はあまりにも独特で。あの子を早く行かせてよかったと思った。こんなのに、耐えられるほど、タフではないだろう。やがて、風に乗って、血にも似た匂いがしてきた。目の前の黄色は、段々はっきりしてきて、その中に赤が混じって見える。

「なんなんだ・・・あれは」

『やあ、初めまして・・・君は岩崎(いわさき)君だね』

黄色は、機械音にも似た声で、不気味に、まるでノイズ混じりの機械音のような声で喋った。その裂けたような口元から、同じように錆びた血のような、匂いが漂う。耐えられなかったわけではないが、あまりにも耐え難いものだった。正直、鼻を覆いたい。

「そうだ」

『そんなに睨み付けないでくレ・・ボクはナイーブでネ・・これはね、ゲームなんダ。最初に君に説明しよウ』

「ゲーム?」

『ああ、それから、あの女の子にも説明しないト。君がわざわざ逃がしてくれた、おかげで二度手間だヨ』

「・・・どういう意味だ」

『説明しないとわかんないだろウ?ン?これは、プレーヤーと、君たちとが連動している、いわゆる、遠隔操作サ』

「よく分からないな・・」

『だろうネ。率直に申せば、君たちは、これからマインドコントロールされて死ヌ。いや、正確には自分の意識は存在しているんだから・・・殺される、と言ったほうがいいのかナ？もちろん、プレーヤーにネ』

「・・は・？」

『君たちは、迷子の子羊。精々、迷えばいイ。今、本当のプレーヤーが画面を起動させたところサ。君たちは今から操られて、死へのストーリーを歩むのサ』

「・・・・」

『随分と青い顔だネ。あ、申し送れましタ。ボクは、このゲームの管理人、ミスターブラッドと申しまス』

「・・・随分と、気違いな名前だな・・」

『痛い目みますよ、きっと・・まあ、いい・・さてボクはあの少女を探さなくては・・それでは、ごきげんよウ』

「・・・・」

「何だよ・・かなり簡単なんだな・・・」

《ミッション１　アイテムが隠れている。それを持って、廃墟から脱出せよ》

絶望

ミッション説明の画面には、スタートボタンも、何も存在していなかった。ためしに、エンターキーをおしてみたり、スペースキーをおしてみたりしたが、無反応。予想外なところで、食わされた感じだ。

「どうなってんだよ・・・やっぱ、キズありってやばいのか・・」

どうしていいのか、分からずしばらく、ぼうっと画面を眺めていた。

時計はもう、昨日から、明日。つまり日付も変わっていたから、こんなゲームだったら、寝てしまおうかと考えていた。その矢先、画面にぼやっと黄色く光る影が浮かんできた。

そして、それは少しずつ、輪郭をはっきりとさせた。

『Ｃｈａｒａｃｔｅｒ　Ｓｅｔ』

「なんだよ・・いけるんじゃん」

画面をクリックすると、ノイズにも似たＢＧＭが流れ始めた。

先輩が言うとおりに、必死に逃げたけれど。先輩はどうしたのだろうか。あの変な影に、どうにかされていないのか。私を逃して、自分はどうするつもりだったのか。

思考回路は、酸素不足と、この状況におかれたせいで、すっかりまともな判断ができなくなっていた。あまりに急に勢い良く走ったものだから、頭の深くがクラクラする。酸素が少なすぎて、目の前も、チカチカしてきたような、そんな錯覚に陥った。

どうにかなってしまいそうだ。荒くなった息を整えながら、辺りを見渡した。

パイプの裏から抜けて、工場のどこかに入ったようだ。案外、簡

単に入れたここには、パイプがそこらじゅうに張り巡らされていて。ここはどんなところか、分からないが、随分なつくりだ。とても高い天井の先には、はしごだの、なんだのが下まで続いていることに気付いた。この上はまだあるようだ――――――・・・。

《ギー・・・ギー・・・》

そのとき、突如として、金属音のような、妙な音が背後からした。

周りが急に煙に似た、妙な空気に包まれたせいで見渡せなくなった。だがしかし、絶対、何かがこちらに近づいてくる気配がする。

「・・・・先輩？」

『残念でしタ。ボクはミスターブラッド。このゲームの管理人でス』

にやっと笑う、その影は、口元が気味の悪くなるほどに、真っ赤であった。先ほどの影だ。間違いない。

「・・・・・」

『ああ、そんなに脅えないデ。先ほどの男性なら無事ですヨ。何もしていませン。ボクは説明をしにキタのでス。このゲームのネ』

「・・・ゲームの説明？」

『率直に申しますと、あなたたちは、駒でス。プレーヤーの操る、駒。プレーヤーはあなたたちを自由に操り、ミッションを成功させ、アイテムを手に入れまス』

「・・それだけ？」

『いいエ。ここにルールがひとつ提示されまス。ミッション成功のためならば、誰を、どの駒を殺そうが、どの駒をどの駒で消そうが・・自由なんでス。もちろん、あなたがたの意識はありますので、ご安心ヲ。意識のあるままに、仲間に殺されるのですヨ。光栄に思ってくださイ』

「・・・え・・」

『あなたたちは、選ばれた、駒、でス』

「・・・・・」

『せいぜい、楽しんでくださいネ。では、ボクはこれデ』

「・・・・・・」
『あ、ひとつ言い忘れてましタ。あなたがた以外、駒は、あと2人、存在しますヨ。この工場内に』
「・・・・・・」
『上手くいったら、生き残って帰れるかもしれませんから、せいぜい、頑張ってくださいネ』
「・・・そんな・・・」
意識のあるままに、私は誰かに操られ、誰かを殺すかもしれない。それを考えていたら、胃液がせり上がって来るような感じがして、気持ちが悪くなった。吐いてしまいたい。でも、これを誰かに見られているのなら・・・。
どこか、羞恥心みたいなのは、自分の中に残っているようだ。とりあえず、どこかに手洗い場のようなものは存在しているだろう。そこへ向うことにした。
ずっしりと、心にのっかってきた、絶望にも似たモヤモヤが、つっかえてきた。

明らかになっていく残酷

《登場するキャラクターは、初期設定では４人。操作できない、管理人をいれると、５人
が登場する。スペースキーで、そのとき操作できるキャラクターを選べる。一度に操作できるのは、ひとり。残りのキャラクターを殺そうが、何をしようが、自由。だから、無論、殺して以後のプレイに影響を与えないようにすることも、監禁してしまうこともできる。
操作はとても簡単で明解。このミッションをクリアするためなら、どんな手段を使おうが、良いというわけだ。だから、キャラクターをひとりにしてしまっても、ＯＫ。次のステージでは、もっと有能なキャラクターが登場するかもしれないのだから、無能なら捨てても、殺しても良い。ただし、それによって、復活はしない。操れるキャラクターが５人を超えると、自動的にイベントが発生する。》
「イベント・・・？」

逃がしたのは、誤りだったかもしれない。一時の感情に任せて、少し怒鳴るように、言いつけてしまったけれど。パイプなんて、見渡せばパイプしかないくらい。なんてことをしてしまったのか。後悔とも、あせりとも取れるような、中途半端な感情が渦巻いていた。
「（どこに行ったんだ・・・）」
走れど、走れど、その影はこれっぽっちも見えやしない。もしや、どこかでどうにかなってしまっているんじゃないのか。負の思考回路は、やがて、スパイラルに襲ってきて。普通の考えを寸断していく。高鳴る脈が痛いくらい。この掌に感じている、冷たい汗はこの状態を表すかのように。どんどんと、気持ち悪くも湿って行った。
不意に思い出した、携帯電話の存在。画面を見れば、圏外になっ

ていた。ある程度、予測できた結果だが、この状況下、かなりの精神的ダメージがある。
「・・・竜子(たつこ)！」
叫んでみても、ただ、何もない音に消されただけだった。返事はない、ということは、この辺りにはいないのか。いや、聞こえていないだけだったら、どうしようか。
「ああ、可笑しくなりそうだっ！」
地面をでたらめに、強く蹴って、そのままただ、前進した。

目覚めた場所は、どこか分からない工場だった。ただ、何もない。大きなパイプがただ、並んでいる、工場。何を作っていたところなのか。ただっぴろいここには、誰の気配もなかった。廃工場なのか。分からないが、ここま間違いなく、人はいなさそうだ。
携帯の画面には圏外の文字。ここは街から遠い場所のようだ。
いつものように、学校で教鞭をとっていたはずなのだが。転寝したはずなのに、気がつけば見知らぬ土地の地面の上だ。妙な話もあるもんだ。
「さて・・どうやって抜け出せるんだ・・・？」
男、またひとり。操られる者が、また増えた。
このステージにて。未確認キャラクター、あとひとり。

新たなる存在

殺してもいい、監禁してもいいだなんて。どれほど、自由奔放なゲームなのかと思った。こんなゲームが存在していたこと自体に驚くくらいだ。これは、ただのゲームのレベルをゆうに超えている。まさしく、これはミッション。

ひとつのステージにひとつ課せられるミッションを、クリアすれば、その分次のステージでの時間の猶予があたえられる。キャラクター、ひとりひとりの、ライフも回復し、操れる時間も、大幅にアップする。たとえば、初期のステージでは、ひとつのキャラクター連続操作可能時間帯（プレイタイム）は、わずか６０分。それが最終ステージでは、２００時間になるらしい。

隠された、クリア方法、アイテム活用術があるかもしれない。そう考え、携帯電話から、ネットに飛んで、アクセスすることになった。

「・・・ブラック・・ゲーム・・と・・・」

１《２０１４年４月１７日　午後１１時１２分
ブラックゲームの攻略法分かるヤツ、書いていってくれ　ｂｙ　アザピー》

２《２０１４年４月１７日　午後１１時３３分
今さっき、初期ステージクリアした！俺ってすげえ！　Ｂｙ名もなきゲーマー》

３《２０１４年４月１７日　午後１１時３９分
名もなきゲーマーさん、攻略法って分かります？教えてください
ｂｙミル》

４《２０１４年４月１８日　午前００時０１分
仕方ないですね。教えましょう。キャラクターは初期は４人、表向きは存在しているんですがね、もうひとり、裏キャラがいるんですよ～　ｂｙ名もなきゲーマー》

５《２０１４年４月１８日　午前００時１１分
隠れキャラってコトですか？どういうことですか？管理人？　Ｂｙアザピー》

６《２０１４年４月１８日　午前００時２４分
いや、管理人は動かせない。絶対。でも管理人と上手いこと話ができれば、もうひとり助っ人がもらえる。奇跡のダブルプレーだ。こりゃ、重宝するぜ。なんてたって、アドバイスくれるんだからよ。
Ｂｙ名もなきゲーマー》

７《２０１４年４月１８日　午前００時２８分
アドバイスってどんなアドバイス？ちなみにどんなキャラですか？　Ｂｙミル》

８《２０１４年４月１８日　午前０２時０９分
遅くなった、すまん。攻略に関するすべてで、名前はエリーゼ。それ以上はいえない。ネタバレになるから。俺はここまで。それじゃ、引き続き、プレイしてきます。今、トイレモードだから・・・
ｂｙ名もなきゲーマー》

「・・・・トイレモード？なんだ、一旦休憩、あるのか・・・」
しかし、気がかりなのは、エリーゼという名の、キャラクターの存在。一体、どういった、影響をもたらすのか。かなり気がかりだ。
携帯を閉じて、再び画面に戻ると、画面にはあの管理人が立っていた。

《操作するキャラクターを選んでください》
「（本当にこの管理人と喋れるのか・・・？）」

こんなところに、ずっといると気も変になりそう。早く抜け出したい気持ちは、とても強いのに、抜け出せない。どこへ行っても、風景は変わらない。まるで見放すかのように。冷たくも、冷酷にこの現実を押し付けてくる。それは視界から入ってくる刺激によって、痛いほどに分かっている。

平坦なる道を歩けど、歩けど。この工場から抜け出せない。おかしな話だ。もうかれこれ、何十分と歩いているのに。

「ここ・・本当に・・どうなってるっていうのよ・・？」

精神的に限界が近いかもしれない。なれない場所、そして、先ほどの精神的ダメージのせいか、随分と疲れていた。疲労はピークかもしれない。かなり辛い。歩き続けた足は、もはや、曲げるのも億劫になるほどに硬くなっている。関節が、音でも立てそうだ。

『ズルッ・・・』

不意に、背後からの音。まるで、何か濡れたものを引きずるかのような。

振り向きたくはない。しかし、自分の生命の維持のためには、振り向いたほうが賢いだろう。いや、しかし、振り向きたくはない。もしも、この世のものとは思えないものが、そこにあったら？私はどう対処できるというの？冷静になれる？いいや、無理。けれど、振り向かず、ここで終わってしまうのは嫌だ。ぎゅっと、なけなしの勇気を振り絞って、後ろを振り向いた。

「・・・・・」

声が思うように出なかった。

そこにあった。そこにいたのは、形すらとどめていない、赤い塊。きっと、人だ。きっと、人だったもの。それが確かな意思を持つよ

うに、こちらに迫ってきている。
『ズルッ・・・』
見間違いでなければ、それは片足。片足の足首から下が、確かに迫ってきている。スピードは遅いが、明らかに。
「いや・・気持ちわる・・っ・・」
前を向いて、走り出そうと、振り返ると。そこには、こちらを向いている影が、暗闇にぼうっと浮かんでいた。
嫌な予感がする。もし、この足の主であったら。私を殺すのだろうか。
パイプの間にある、非常口のマークをかろうじて、見つけ、そこから脱出することにした。
早く、先輩と合流しなければ。恐怖が、ちっぽけな勇気を少し後押しした。

捜索

見慣れない廃墟ではあったが、いつぞ、ここは目にした景色であった。確か、随分と前に廃工場となった、セメント工場だ。教科書の隅であったか、何かの新聞か、それか忘れたが。一時は盛んに稼動していた。閉鎖理由の裏には確か、不景気が背景にあったような気がするが。まあ、今はどうでもいい話かもしれない。脱出するのが、先決だろう。

『ガサ』

「誰だ」

「・・・・驚かせて、すみません・・」

「・・・ああ、こちらこそ、すまない・・声を荒らげて・・私は菅原(すがわら)。教師をしていたんだが・・気がつけば、ここだ」

「岩崎(いわさき)です。自分も同じく、気がつけばここに・・」

「誰かを探しているような、声・・君かい？」

「はい・・後輩の、泉水(いずみ)もここにいるはずなんです・・どこかにいるはずなんですが・・危険な局面に・・逃がして・・この様で」

「私も手伝おう・・探せばいいのだね？」

「はい。長い黒髪の・・ひとつにまとめていると思うんですけれど・・・割と、身長の大きい・・１６０くらいで・・・」

「そんなに気に病まないで・・きっと大丈夫ですよ」

「・・・・・もしかして・・会っていないんですか？」

「会っていない？」

「ミスターブラッドと名乗る、仮面のヤツに」

「目が覚めてから、君以外、誰とも会っていないよ。間違いなく」

「・・・この空間はゲームの仮想空間です。現実でありながら、これから操られるんです、俺たちは。意識あるままに殺人を犯したり、誰かを傷つけることもある。見えない、プレーヤーに操られて、俺らはそいつの意のままに動くことしかできないんです」

「は・・・っ・・笑わせてくれるな・・そんな話・・」
「笑わないでください。本当のことです」
「それは君の眼に、がっつりと、書いてあるさ。分かってる、笑ったわけじゃない・・ある一種のため息だ・・あ、いや。見苦しいまねをした。すまない。とりあえず、探そうか」
「はい」
「どうするか？共に行動したほうが、二の舞にならないようだが」
「そうしていただけると、ありがたいです」
「承知した。では、君が来た方向より、逆に進もう。ちなみに私はまだあんまり歩いていないんでね」
「はい」
予想外の合流、とでもいえようか。とにもかくにも、人手は多いほうが有利かもしれない。操られる前に、この空間から抜け出さなければ。

さっきから、急に重たくなった。何のデータが作用しているのか分からないが、反応が鈍い。一分ほど前、《管理人を探す》をクリックしたあと、画面に反応が現れなくなった。おかしな話だが、随分、喰わされている。
「やっぱり、傷ありなんて、代物買わなきゃよかったなあ・・」
そう、ぼんやり呟いていると、画面に意外な反応が返ってきた。
真っ暗だった画面に、うっすらと背景が現れ始めた。天井の高い、そこそこ明るい空間だ。初めてプレイするわけだから、なんともいえないが。リアリティーは確かに、半端ない。ハマるのも、どこかうなづけた。
「なんだよ・・これ・・実際にあるみたいだ・・」
《こんにちは、プレーヤーさん。お名前のご登録をどうゾ》
「名前・・？・・・いいや、テツヤ・・と」

《テツヤさマ。アイテムはもうお決めになられたようですネ。早くアイテムを見つけて、ここから脱出してくださいネ。時間は無制限。頑張ってくださイ》

「お・・・話せるんじゃねえのかよ・・？」

出鱈目に、画面をクリックしていたら、去りかけた管理人が反応した。

＞i３４０７９―２８５２＜

《迷える子羊のために、お助けのアイテムが隠れています》

画面上に浮かび上がる、選択肢。この話、かなりうまい。

「こりゃ、聞いとかないとソンってもんでしょ・・」

夢中で、画面を選択肢にあてて、エンターキーをおした。

操作開始

詳しく調べていくうちに、エリーゼのことが分かった。どうやら、ファーストステージにのみ現れる、ゲームナビゲーターのようだ。主に、ゲーム内の道順、どこらへんがキーポイントか、などのアドバイスをしてくれるようだ。これは、確かに重宝するが、ファーストステージのみというのが、本当に残念でならないと思った。これは実に応用の利きそうなキャラクターなのに。しかし、これは操作できるキャラクターの頭数に入るのだろうか。もし仮に、入るのであれば、これは何らかのイベント発生のきっかけになるだろう。

しかし、公式ガイドブックのどこを読んでも、そんなキャラクターの存在はないし。第一、操作できるキャラクターが、画面と違っている。自分が今、プレイしているキャラクターは一覧のどこにも乗っていない。

やはり、傷物だったからか。

しまった、そう感じながらも、作戦を練ることにした。どうしたらいいのか。

『プルルッ・・・プルルッ』

「びっくりした・・・」

こう、真夜中の電話以上に驚くものがあるだろうか。ディスプレイには、《栄太(えいた)》の文字。こんな時間にどうしたというのか。

「もしもし？」

『あ、もしもし、どう？』

「どうって・・ゲーム？」

『うん』

「ん～・・・若干、難題かも・・お前、やったことあるんだっけ？」

『ファーストはね。そこでやめちゃった・・めんどくさくなって。セーブできないしな・・・』

「ふうん・・・お前、公式ガイドブックと登場するキャラが違ったりした？」
『それ当たり前だよ。公式はあくまでも、例でしかないんだ。キャラクターは現実味を持たせるために、ひとつひとつ、違ってたりするよ。そりゃ、ガイドブックどおりの人もいるけど・・ブラッドとか・・』
「あ～、知らなかった」
『ちゃんと読めよ・・』
「はいはい、了解」
『ところで、もう始めた？』
「いいや・・まだあんまし・・・Ｈｏｗ　ｔｏ　ｐｌａｙ・・かな？」
『ダッセ・・』
「うっせえ」
『いいか、おっさんのキャラクターとかは、早めに殺っといたほうがいいぞ。後々、足を引っ張る。おばさんも一緒。そんな状態でイベント発生なんかしたら、たまったもんじゃないからな』
「おう・・・」
『じゃあ、また』
「あ、ああ。ありがとな」
『いえいえ』
おじさん、といえば。あの教師くらいか。名前は確か、菅原（すがわら）だったか。

どくん、どくんと。心臓が高鳴る感じがする。おかしなくらい、体温が高まっていくのが分かる。視界がだんだん、熱のせいかぼやっとしてきて。身体に力が入らなくなっていった。けれど、足は意思を持って、確かに違う道へと進みだした。一歩、一歩、確実に。

どこかへ、私の意志を無視して進もうとしている、この体が。
途中で目の端にとまった、ガラスの破片。それを私の手が握り締めた。はっきりとした痛みとどうじに、赤い血が手から垂れた。私の意志ではない。意思ではないけれど、このガラスをどうにかしようとしている。
いや、すでに私は、操られているようだ。

息を切らして、焦って探しても、その後姿すらつかめなかった。半ば、諦めかけていた、瞬間だった。不意に、背後から嫌な気配を感じた。菅原(すがわら)さんも、ほぼ同時に感じ取った気配。
「・・・・あれが・・彼女かね・・・・？」
「・・・た・・」

＞i341198―2852＜

竜子(たつこ)の手は、血まみれだった。そして、なぜか虚ろな目をしていた。

消去

何がどう、邪魔をして。イベント発生内を妨げるかは、理解できなかったが。とにかく、その一番の年寄りであった、菅原とかいうキャラクターをまず消すことを、早々に決断した。

どこに居るか分からない。とりあえず、操作しやすそうで、一番若そうなキャラクターにした。エンターキーをおして、プレイが本格的にスタートする。

《泉水竜子選択》

真っ赤に染まった手は、意思もなさげにだらんと、垂れている。まるで蝋人形のようだ。血の気が、いくらか引いている。唇が嫌に白っぽく、恐ろしいほど。

「泉水・・・・・ど・・」

「手から血が・・」

「・・・・菅原さん・・もしかして・・これが操られている状態なんですかね？」

「・・・分からない・・私は普段の彼女を知らないから、分からない。一概に言えないよ」

「・・・・そうですよ・・ね」

「菅原は、お前か？」

「・・・泉水・・お前、何て・・」

岩崎の制止を振り切り、菅原が重たげに、口を開いた。

「ああ、私だ」

どこか緊張めいた表情の端、脂汗が光っていた。

「お前を殺す」

たどたどしくも、しっかりと、竜子の口からそう漏れた。岩崎の顔

が、不意に恐怖の色を映し、目線がそこで釘付けにされた。
竜子(たつこ)の手からはなおも、血の垂れるのが止まらない。
これは自らの意思でないとしか考えられない。そうでもしないと、理屈が合わなすぎる。道理もなにも、通らないというものだ。
「なぜに、そうする？」
「これはゲームだ」
「ああ、分かっているよ。泉水(いずみ)くん。しかし、動機が若干、不透明だが？」
「ゲームに弱い者はいらない。足枷もいらない」
「何も知らないうちから、私は足枷なのかね？」
「ああ」
「随分、思い切った口ぶりじゃないか」
「当たり前のことを言ったまで」
「ああ、そうだな・・構わないが・・少し、すぎちゃいないか？」
「そう思うのはお前の勝手だが。もう言うことはないか？」
「ああ、ない」
「菅原(すがわら)さん・・？」
「死にやしないさ」
「さて、どうかな」

操作する上で注意点がいくつかある。キャラクターを操作できるといっても、それは一体のみ。他は、どう反抗してくるのか、どう動いてくるのか予測はできないし。どう危害を及ぼされるかも、分からない。万が一があり、そのキャラクターのライフがゼロになろうものなら、そこでゲームはオーバー。終了となる。また一からプレイできるが、それが最終ステージであっても、ファーストステージからとなる。
このとき、たとえばファーストステージで閉じ込めたキャラクタ

ーが、セカンドステージで必要になった場合、またファーストステージのそこまで戻って。そこからのプレイ開始となる。そのため、違う結末のセカンドステージを迎えるケースもある。

どう動かすか、消すか。それはプレーヤー次第。

無論、延々と操作できるキャラクターをイベント発生条件以下の人数で、ステージで動かし続けることもできる。

ちなみに、イベントは各ディスクごとに内容が異なるので、断定はできない。

しかし、９０パーセント以上のニセモノのディスクでは、抜け出すためのヒントがいくつか提示されお助けアイテム等、支給された。

無論、本物をプレイしているのは、ひとりであるから。この場合のイベントの発生は予測、不可能である。

反撃

掌(てのひら)に食い込む、ガラスの破片が痛い。鈍く神経の深くで響くような、痛みがドクドクとした。これは私の身体であるのに、私の身体でないみたいだ。苦しいわけではないが、するりと一枚、誰かの神経が自分の中にあるよう。何も考えずとも動く手も、足も不思議な感じがした。それから、自分の口から出てくる言葉。明らかに違うのに、別に違和感もないし。いつも喋っている感覚とそう違わない。変な話だな、そう思った。

先輩の顔が強張っているのも、菅原(すがわら)さんという、あの男の人が警戒しているのも。手に取るように、全てが分かる。皮膚に刺さる緊張感が、これが生死をわけたものなんだって、少なからず訴えかける。変な話。本当に変。だって、殺しあう必要なんてないのに。

頭の隅で、私、死んじゃうかな。なんて。どこか生への無頓着な感情が、知らず知らずに生まれた。

「私はね、昔、武術をしていてね」

菅原(すがわら)が得意げに、そう言った。そういう端から、泉水(いずみ)の何も映さないような、無の瞳が何かを仕掛けようと動いていた。その影が、ゆらゆらとちらつく。うろつく、揺れる。しゅっと、一瞬、何かが光ったような錯覚に陥った。

「っ・・・」

菅原(すがわら)の顔が、微妙に歪んだ。頬に筋が走る。どくっと、赤い血が流れ出た。それによってやっと、顔が切られたのだと、分かった。

それは後ろで、どうしようもなく立っていた岩崎(いわさき)にも分かったようだった。

「大丈夫ですか！」

「平気だ・・私は平気だ・・気にしないでくれ」
「・・前っ！」
「・・・っち・・・・危・・泉水くん、君はなんてことを仕出かすんだ」
「邪魔だ、お前が邪魔だ」
「だから、なぜにそうなる？何かしたかい？」
「邪魔だといったら、邪魔だ、死ねぇっ」
「っと・・・・危機一髪だ・・君はとてもいい動きをするね」
菅原が一瞬、微笑んだように見えた。
「・・・岩崎くん、少し彼女を傷つけるかもしれない」
「え」
重い音とともに、泉水の身体が膝から崩れ落ちた。
意識を失ったように見える。
「・・・気絶させただけだ・・大丈夫・・」
「・・・はっ・・ぁ・・・」
喉に突っ掛かっていた、息がようやく吐き出せた。肺の深くが妙に痛い。
「どこか、安全なところで寝かせよう・・」
「・・・はい」

あのキャラクターがあんなに反撃してくるなんて考えていなかった。
おかげで、泉水とかいう一番若いキャラクターが、２０もライフを減らす破目になった。ライフは１００で今のところ全体なわけだから、五分の一もあの一撃で失ったことになる。侮るがたし、あの男。
「くっそ・・上手くいかない・・・」
ふと、時計を見ると針は真夜中の１２時を回っていた。もう、日

付が１５日になっている。プレイし始めて、もう3時間は経過しているのか。目の奥が痛い。しばしばするというか。しかし、プレイをやめたい気分ではなかった。

「・・・明日は・・何もなかったはずだ・・」

一先ず、このステージをクリアしたい。

言っていたキャラクターも見つからないし、どうせ3人ではイベントすら発生しない。ムダに人員を削るより先に、クリアしてしまおう。

気分を持ち直して、また画面に向った。

現在、２０１４年6月１５日、午前０時５６分。

不明確な結末

関係のないキャラクターまで、支配してしまえるアイテムがひとつ、ゲーム内に存在する。失敗すれば、かなりの打撃をこうむるだろう。ゲームオーバーは否めない。危険をはらむと同時に、それ以上の好成果も期待できる。

そのアイテムが出てくる条件は、なんとも気まぐれで、まちまちである。

しかし、仮に出てきたとしたら――――――――――・・・・結末を変えることができるかもしれないのだ。

胃が悲鳴を上げたかのように、キリリと痛んだ。そういえば、長いこと何も口にしていない。口の中が渇ききって、ベトベトする。若干、こういうときでも口臭のことも頭の隅で考えてしまうのだから、人間、不思議なものだ。

「岩崎(いわさき)くん」

「はい？」

「先ほどは手荒なことをしてしまって、申し訳ない」

「いいえ・・大丈夫です・・・寧ろ、それは彼女に言ってやってください・・自分にはかれこれ言う権利はないですから」

「・・・それでも、言わせてほしかったんだ・・・」

「ええ・・」

「ここから早く出なければならない・・しかし、ここの検討も何もつかないんだよ」

「同じです・・」

「・・はあ・・・」

菅原(すがわら)が岩崎(いわさき)の目の前に、重たげに腰を下ろした。けだるそうなの

が、よく分かる。眉間の皺が、少し深くなったように見えた。
「泉水(いずみ)とは、随分と前に出会ったんですよ・・・彼女が入学して・・・そのときはすでに社会人でしたけれど・・」
「・・・出会うきっかけは、何だったんだい？」
「ライフルです。ライフル射撃・・・そういう部活があったんですよ・・・自分も京成(けいせい)高校の出でしたから・・地元の射場は、３校ぐらいが一緒に使っているところで・・もちろん、一般も、何も一緒でしたし・・料金だけ払えば、誰だって使えましたけれど・・・」
「そこで、どうやって？」
予想外に、食いついた様子に驚きながら、記憶を辿っていった。

射場の前で、少し戸惑っている姿を印象深く、覚えている。あの時はまだ、高校2年生ぐらいだったのだろうか。俺は当時、２４で、社会にも出て、それほど経っていなかったせいか。親近感に似たものを抱いたことを、覚えている。
聞けば、兄の弁当を届けに来たという。彼女の兄は俺の後輩で、当時の部長だった。京成(けいせい)高校でも、トップを争う腕前の、かたっぽの妹。それだけでも、素質は十分に思えた。兄がこれほど著しい成長をしているんだから、この子もいけるんじゃないか。確信めいた、意味不明な期待は大きく膨らみ。そうしているうちに、彼女も射撃を始めた。
その確信はどんどんと、現実になっていった。腕前は、伸びていった。
抜かされそうな錯覚も感じた。俺らしくもない。そう思いながらも、焦燥感は拭えなかった。
どこまで彼女が追いかけてこれるのか。7年の溝を、どうつめてくるのか。気になって、仕方がなかった。
そうしているうちに、彼女も選抜された。あの昔の感覚がよみが

えるようだった。やはり、追いかけてくるのか。いや、追い越されるのか。

一体、これは何の現実なんだろう。
どの世界の片隅に、捨てられたんだろう。
誰が、この命を握っているんだろう。

暗くなってゆく

何事にも裏側というのは、存在する。
このゲームの、その裏側を解けば難しいことではない。
まず、５人以上、操作可能なキャラクターが現れた時点で、まずイベントが発生する、この条件。これは、最悪の場合を想定して、回避し続けることが可能だ。
このゲームは三部構成である。ひとつのステージごと、ひとりづつ、キャラクターが増えていく。ファーストステージは、４人存在している。すると、セカンドステージでは、５人、になる。この時点で、イベント発生の条件は揃うわけだが。しかし、能力の低いものから順に、閉じ込めておいたり、殺しておいたらどうであろう。
イベント発生の最大の、条件は満たさないのである。

赤黒い目の奥に、わずかな興奮がうかがえるようだった。
マスクのような、のっぺらな表情の下が明らかに変化していた。
いやはや、本物のディスクをプレイする人間とであったのは、いつぶりであっただろうか。前のプレーヤーは随分と下手クソだった。セカンドまでしかプレイしなかったくせに、可笑しくなってそのまま病院にいった。後は知らない。知ったことではない。
可笑しくなろうが、死に行こうが。勝手にしてくれ、ボクには関係ない。関係など、あってたまるか、そんなゲーマーごときと。興味もないわ。
せいぜい楽しませてくれれば、それでいい。
「可愛いのはお前だけダ。エリーゼ」
「御父様」
「まだ出番ではないヨ。もっと面白いときに出て行こうネ。それ

まで、ボクと一緒にここで遊んでいようネ」
「はい、御父様」
エリーゼが、そのコンクリートの冷たい床の上に腰を下ろした。
その頭をゆっくりと、優しげにブラッドは撫でていた。
まるで、人間のような面影をたたえたように。

抜け出せない、どこに行こうと、同じ顔をしたこの工場は少し寒い。広い空間に抜ける風だけが、夜の訪れを教えるように、だんだんと厳しくなってきた。
意識をなくした、泉水(いずみ)の身体が冷え切ってしまわないように、抱え込んでいた。ときどき訪れる浅い呼吸で、もうすぐ目覚めるのか、と僅かな期待が混じる。しかし、目は開かない。随分と深い眠りに落ちているようだ。
「手加減はしたつもりであったんだが・・・」
「大丈夫ですよ、多分」
この程度で、だめになってしまう、彼女じゃない。きっと、大丈夫。
ただ、この寒さが心配だ。Tシャツ一枚に、薄いジャージのズボンじゃ、目覚めたとき、きっと寒い。辛いだろう。いくら夏が近づいているとはいえ、ここは人気のない廃工場。動くものなど、自分たち以外にいないのだから、熱エネルギーが外からもらえることはない。
「・・・何か食べるものがあればいいのだがね・・・」
「でも、こんなところ、何もないでしょう・・・」
「水だけでもあれば随分、変わるんだが」
「・・・あれば、いいですけれど・・」
「私は少し、探してくるが」
「・・・・どうしましょうか・・・」

「君、ストラップは持っているか？」
「はい」
「鈴がついていたり・・」
「あ、はい。小さいけれど」
「それを合図にしよう、どちらかが鳴らしたら、鳴らし返して・・・もし、他の何かだったら、そこから即刻、立ち去る」
「了解」
「では、行ってくるよ。彼女を頼む・・・それから」
「はい」
「謝っておいてくれ・・目が覚めたら・・手荒なことをしてしまったから」
「はい」
立ち去る菅原（すがわら）の後姿はどこか、寂しげだった。そういう風に、見受けられた。
「・・・・・抜け出せるかなあ・・・」
ほうっと、ついたため息の下、わずかな変化が訪れた。反応のなかった、腕の中に、小さな動きがあった。
わずか、わずかだが、まぶたが持ち上がったように見えた。
「泉水（いずみ）・・・？」
「・・・・・先輩・・・わ・・」
「大丈夫か？痛いところは？」
「ない・・です」
「そうか、よかった・・・」
「あの人は？」
「水とか、探しに・・それから、手荒なまねして、ごめんって」
「・・・・・・」
「泉水（いずみ）？」
「・・・・帰りたい」
「うん、よし、帰ろうな。一緒に帰ろうな」
ゆっくりと、なで続ける手の温かさとは裏腹な、涙がしみを作っ

ていった。

イベント発生

世界中にある、ニセモノのディスクを全て無視して。
これは本物だ。本物のディスク。誰が何を言おうと。公式ガイドブック、攻略本など、使えやしない。そんなもの、捨ててしまえ。そうして、はまり込め。この残忍なるステージに。

プレイ開始から、随分と経っていることも。なかなか進まないことも、自覚はあった。でも、脳のどこかで、ここで辞めたくない、一気に全クリしたいという願望が残っていた。いつもプレイしているとき以上の興奮。
「・・・どうやったら、どうなるんだよ・・まったく」
出鱈目に、画面をクリックしたところで、何も出ないし、何も発生しない。ただ、彷徨っていた。菅原(すがわら)とかいう、あの使えないキャラクターで。ちょうど、管理室のような、ボイラー室のような、パイプだらけの空間に出た。
唸らないパイプや、埃まみれの地面がやけに冷たい。質感はリアルに画面から迫ってくる。
少し行った先、明るい色の箱のようなものが見えた。
この空間に似合わない、とてもキレイな朱色。木箱のようなそれは、ただずっと時を待っていたかのように主張していた。近づけば、近づくほど。主張して迫ってくる。
手に取ると、それは両手で抱えられるほどの大きさ。鍵も何もなく、簡単に開いた。
中には何も入っていなかった。まあ、当たり前といっちゃ、当たり前の結果か。アイテムがこんな分かりやすいところに隠れているはずもない。

「期待してソンした・・・」
《アイテムを入れる箱を発見。イベント発生の条件、その2を満たしました。イベントが発生します。イベントを発生させますか？》
突如、画面にそんな文面が現れた。どういうことだろうか。5人になったわけでもないのに。しかし、ここでイベントとは、なんとも興味深い。それが正直なところだった。もしかすると、エリーゼが見れるかもしれないし、ここでアイテムが手に入って、そのまんまセカンドへ。そんな美味しい展開も、不可能な話じゃなくなったってわけだろう。
イベント発生を、考えるより先に選んでいた。
《イベントを発生させます。これより先のプレイにて、邪魔だと思うキャラクターのライフを他のキャラクターに贈与し、キャラクターをひとり消すことができます。リスクはゼロ。》
なんて好条件なんだろう。この期に及んで。こんないい条件にめぐり合えるなんて。今まで手こずって、いらだっていたことも忘れ。躊躇することもなく、すぐに菅原(すがわら)を選択した。こいつはいらない。
「抵抗しやがって・・さぁ・・・」

まるで、憎い誰かを見ているようだった――――――・・・・・。

気がつけば、目を開けば、そこは白い部屋だった。キレイな、衛生的な場所。廃墟ではないようだが、はて、ここは。
「気がつきましたか？」
「・・・・ここは」
「館・・人間の館です」
「・・・は？」

「最後に行き着く場所・・あなたは選ばれました。二人は残った・・おめでとうございます」
「・・・どういう・・・」
「・・・選ばれたんですよ、いらないって」
「・・・・君・・」
「私はエリーゼ。このゲームの裏の管理人。サポーターであり、処刑を下すものです」
「・・・なっ・・」

＞i35313―2852＜

「どうやって死にたいか？選んで」
「・・・・」
「喉は渇いているか？」
「え・・ああ・・まあ・・」
「そうか、では水にしよう」

残忍さも、何もかもがウリなんだから。喉など半端に癒してくれるわけなど、なかろうに。分からぬか。お前は。
足には鉄の足枷を。口には猿轡を。中途半端に酸素ボンベをつけて。さ、貯水池の深くに沈めてしまおうか。
「バイバイ」
「っ・・・」
「ボンベには、10分ぐらいの酸素はあるよ。せいぜい、鼻から入らないように、気をつけて・・それじゃあ、バイバイ、菅原（すがわら）さん」

廃工場の中、まだ出くわしていないキャラクターが、ひとり。

募る違和感

まるで、それは記憶のどこかをかいつまんでいくように。恐ろしいほどの懐かしい感覚を含んでいるようだった。
この場所を、ニュースなどではなく、現実(リアル)に知っているようで。
一度、目を覚ましたその瞬間より、そう感じていた。

いつまで待っても、帰って来なかった。菅原(すがわら)という、あの男。待ち呆けて、一体、何時間経ったんだろう。少しずつ、闇が迫ってくるようだった。空の端は、こういうときでも綺麗に、残酷にオレンジめいてくる。本来ならば、温かなその色彩に、今は寒気すら感じた。どうしてこうも怖いのか。意味不明な恐怖心やらが、心のどこかで蠢(うごめ)いていた。
「帰ってきませんね・・・」
「うん・・・探しに行って・・・入れ違いも・・・」
「・・・」
「どこにいったんだろうなあ・・そんな顔、するな、ん?」
「・・・」
「置いていかないから」
違う、心配しているのは、そういうことじゃない。気に掛かっているのは、そんな些細なことじゃない。気付いてよ、重たいこの現実。
ねえ、先輩、下手したら、あなたと殺しあうかもしれないんですよ。あなたが私が殺すとき、抵抗なんてできないでしょう。でも、私を失っても、そう傷は深くないはず。けれど、私は仮に、あなたが死んだとしたら、その現実に耐えられないんです。
ただ、それが、今は怖い。これが、本当の恐怖心ならば。ここか

ら出れば、これは払拭できるんでしょうか。
誰も救ってくれない、この現実から。いいえ、救う御手の届かない、この奈落の底から。
迫る夕刻が、痛いほど、視界に訴えてきた。

妙な興奮が、全身を包んでいた。ついに、邪魔者を排除できた。いや、排除してやった。これでわずらわしいのは、何もないはず。
画面を離れて、ひと休憩をはさもうと、モードを切り替えて、一階に下りた。
現在、２０１４年６月１５日の３時２２分。さすがにこの時間帯では、家族の誰も起きてはいない。もうすぐしたら、母が起床して、犬の散歩でもいくころだろうか。
「・・・なんかねえ、かなあ・・・」
冷蔵庫を開けると、案の定、夕飯の残りが入れられていた。多分、弟たちの食べ残しだろう。冷えたマッシュポテトと、まだ生ぬるさの残る麦茶をコップに入れて、リビングに行った。静かについたテレビの画面に、早朝深夜のニュースが並んでいた。
『今週一週間で急激に失踪者の増加』
「また、このニュースか・・・」
消える人間が、最近多すぎる。ネットとかで、失踪なうぃなんて、騒がれているけれど。若干、理性的な感情が、これは可笑しいんじゃないかと、疑っていた。何が何でも、急激に変わるのって、可笑しいと思う。これは何かの予兆なのだろうか――――――・・・それとも、なにかがどこかで起こっているんだろうか。
マッシュポテトをつつく手を、止めて、不意に考え込んでいた。
「いっけね・・・まだプレイ中なんだよ・・・アイテム探さなきゃ」
独り言に、そう言って、また画面に向うべく二階に駆け上がった。

アイテムの正体

プレイ開始から、かなり経った。随分と廃墟内をうろついたはずだ。しかし、これといった手がかりは見えない。何も、見つからない。あのイベントが発生してから、随分と長い間、何も起こらなかった。寧ろ、あの人はそんなに必死に消す必要もなかったんじゃないか――――――・・・削除してからなんだが、そう思えてきた。けれど、他のキャラクターのライフが無駄に削られて、動かせなくなるよりはマシかもしれない。泉水（いずみ）とかいう、あの女のキャラクターだって、あれ以上ライフを失っては、操作不可能になる。有意義だったはずだ。

《アイテムのヒントを聞く》

不意に、画面の端、ボヤっとその文字が浮かび上がった。不思議な話だ。普通なら、こんなことなど、ないはずだろうが。

その文字をおすと、あのキャラクターの画面に切り替わった。ミスターブラッドだ。

《アイテムのヒントを授けましょウ。アイテムはこの廃墟の源（みなもと）ニ。ここの電力をまかなっていた場所ですヨ》

「・・・まかなっていた場所？・・・エネルギー？」

エネルギーをまかなうなんて、かなり限られてくる。何だろう、電力を貯蓄しておくところか。しかし、こんなに広い施設のエネルギーをまかなうのに、どこかから引いていたら、おそろしく浪費してしまうだろう。

ならば――――――――・・・発電所・・・？

こんなに広いところなんだから、発電所くらいあっても可笑しな話じゃない。むしろ、そのほうが自然だろう。

どこかの中で、それっぽい空間を見た記憶がある。確か、かなり上のほうの階にあったような。

そんな思考回路の中で、ふと気付いた。管理人と、話ができると

いうのは、こういうことか、と。
「・・・よし・・・じゃあ、今度は男のほうで行ってみるか・・・」
キャラクターの、岩崎(いわさき)を選択した。

まるで、脈でも高鳴っていくようだった。体中が熱い。徐々に、薄くなっていく、遠くなっていく自分の意識。言うことを利かない、機械のように。まるで配線でも狂ったように。自分の身体の制御が利かない。自分の意思で動かせない。遠のく意識を、引き止められない。
変だ、絶対に。
「・・・っ・・・」
「せん・・・？」
「・・・大丈夫っ・・・ちょっと・・・そこで・・・待っててくれ・・・っ」
「は・・・はい」
「あ・・・はぁっ」
頭がぼやっとする、ダメだ。この子の前で、倒れるわけにはいかない。ダメだ、このまま倒れてたようじゃ、ダメだ。しっかりしろ、自分。ちゃんと後輩のひとりくらい守れないと。ダメじゃないか。しっかりしろ、意識を保て。
そこから、どう歩いたのか、分からない。けれど、気がつけば随分と遠くまでこれたようで。そこで、緊張のいとでも切れたかのように。プツンと、意識が途絶えたようだった。まるで、テレビの電源でも落すかのような、感覚。

歩き回った挙句、やっと見つかった。発電所は、施設の東側の、最上階にあった。工場内の、小さなエレベーターのような乗り物に、揺られて。そこから、階段を伝って、上った先、それらしいものが並んでいた。大きな、大きな入れ物みたいな、箱のような。こんなところで、エネルギーをまかなっていたのか。不思議な感じだ。これっぽっちの材料で、エネルギーって生み出せるものなのか。

どことなく、工場を見学している気分に浸りながらも、アイテムを探した。

アイテムなんて、なんなのか分からない。それ自体の、ヒントも知らない。場所を知って、どうしろというんだろう。ここから脱出する。アイテムをもって。それは理解できているんだが、一体、アイテムが何かを知らない。

「・・・ヒントが少ないよ・・・難しい・・・」

呟いた声に、まるで反応するかのように。画面が、一瞬、暗くなった。

そして、文字が、浮かび上がった。

《アイテムは、紙でできています》

なんて、簡素なヒントだろう。アイテムが紙だと。紙、紙、紙・・・。そんなの幾らでもあって、何のヒントにもならない。尚且つ、その紙とかいうのが、画面のどこにも見当たらなかった。

《エネルギーの源のそば、はさまれています》

はさまれている、なんていう気がかりな言葉を表示した後。画面は戻った。

「・・・じゃあ・・・あの箱みたいなところの近くに・・・？」

グルグルと、その周辺を回っていたら、何週か回ったときに、やっと気付いた。溝に、何か茶色いものが挟まっている。

「これか・・・？」

それを引っ張ると、案外、簡単に引き抜けた。

茶色いシミのある、変色した紙。広げると、それは工場を含む、周辺の地図だった。

《アイテム発見。ステージクリア。おめでとうございます。》
変な感じだが、クリアしたらしい。このステージを。
妙な感じというか、案外、素っ気無いもんだ。終わったらしいのだ。
「・・・うおい・・・なんだ、素っ気無い」
思わず漏れた言葉と、それからなんとも言えないくらいの脱力感。
「・・・疲れた・・・」
セカンドステージに入る前に、モードを切り替えて一旦、眠ってしまおう。
画面を切り替えて、ベットにそのまま、ダイブした。

笑い声

またも人間は、しれっと人を殺してしまった。なんとも、笑いが止まらない。腹の底が、うずくように、なんだかむずむずするみたいに。随分と可笑しな話だが、この瞬間、愉快でたまらない。人間が、ゲームをクリアした瞬間の、やり遂げた顔を見たときが。

「またやったヨ・・・エリーゼ、お疲れ様だったネ」

「・・・いいえ」

「そうダ、そろそロ、ニュースの1本でも報道される頃じゃないかナ？あの2人・・・まだゲームの中から出られないからネ・・・そう、あの少年ハ？」

「まだ、どこかに隠れているのかと」

「そうカ・・・セカンドステージでは、姿を見せてくれなきゃ、プレーヤーもつまらないもんだからネ・・・次、拒むようなことがあったラ、摘み出して良イ、あの2人の前ニ・・・きっと庇うだろうからネ」

「了解致しました」

「さあ、お茶にしようカ？あのプレーヤーも睡眠中らしいしナ。エリーゼ、お茶を淹れておくれ・・・それから、あの2人もここに招待しよウ。疲れを癒して貰いたいからネ」

「はい」

ほうら、笑いがまたこみ上げてくる。

テレビがやがて、そのニュースを頻繁に報道しはじめた。何かが可笑しいと、やっと気付いたらしい。この事件の、失踪者――――・・・そう、この失踪者の急激な増加を、やっと可笑しいと気付いたらしいのだ。

この数日は、あまり動きはないらしい。どうやら、失踪者が戻ってくることもまだないらしい。言うまでもなく、この失踪者のリストに、あの2人の名前も、連なっていた。
泉水(いずみ)の母親は、少しナイーブになっていて、滅入ってしまっているらしい。
また、岩崎(いわさき)の母親も同じようになっているらしい。うつの、一歩寸前のような、半ば廃人のような状態になっているらしい。
わが子を失うと、そうなってしまうのだろうか。それは、おのずと分かってくることであろうが、見ているほうとしては、目を覆いたくなる現実だった。
この事件と平行して、またうつ病の患者も増加しているようなのだ。

目が覚めると、そこは真っ白な部屋だった。今さっきまでいた、あの廃墟はどうなったのか。私は一体、こんなところで、どうしているのか。不意に目を落とした、自分に身体は、上品なワンピースに包まれていた。
少しゴシック調のデザインが、あまりにも何かそういう趣味めいていて、可笑しな感じもしたが。
床に足をつけると、床は驚くほど、温かかった。どうやら、この部屋、この空間は建物の中のようだ。しかも、稼動している。
『目が覚めたかイ？お嬢さン』
「・・・あなた・・・」
『ミスターブラッド。覚えてくれたかナ？お久しぶリ・・・最初のステージはクリアしたらしいからネ。君たちは一旦、休憩としよウ、ネ？』
「・・・せん・・・」
『彼は隣の部屋。きっと眠ってるんじゃないかナ？さっきの君み

たいにネ』
「・・・何をしたの・・・」
『少し、楽しませてくれないと面白くないだろウ？プレーヤーもさ』
「・・・何が言いたいの」
『人間って面白いネェ・・・こんなにあっさリ・・・さあ、お茶にしよウ？』
「・・・」
『拒む権利はないヨ』
「・・・」
『そうにらまないデ。まだゲームは始まっていないんだヨ』
「・・・」
『さあ、お手ヲ』
「・・・」
『いい子だネ』
そう、従うしかない。この空間に身をおく限り。

ねえ、こうも抗えない。無能な人間の姿、非力な人間のさま。ああ、笑うしかないだろう。
濃い紅茶を啜りながら、目の前の少女を見ていたら、笑いがこみ上げてきた。何人目だったっけな。こうやって、このゲームの中で死ぬ運命を辿る、うら若い女は。
ほうら、また面白くなってきた。

隠された真実

静まり返った空気の中。突然に、口を開いたのは、ミスターブラッドだった。

「そういえバ、覚えているかイ？」

「・・・何を？」

「君たチ、全員、このゲームのキャラクターになった人間たチ。全テ、きっかけはあったのサ」

「きっかけ？」

「うン。覚えていないかネ？」

「・・・覚えていないわ」

「う～ン、計画はうまくいったようだネ」

「・・・何、それ」

「君たちハ、打たれた記憶はあるかイ？」

「・・・赤い、ス」

「それだヨ。覚えているではないカ」

「・・・あれは」

「まア、最初はあれじゃないヨ。もちろン、別にあるけれどモ。大まかにはあれサ」

「どういうこと？」

「君たちの中、核となくデータをもぐりこませタ。覚えてなくって当たり前ダ。予防接種の中に混ぜたからネ」

「それって」

「そうサ。誰だっテ、ターゲットになる可能性はあるシ、誰だっテ、プレーヤーになる可能性がるのサ」

「ねえ、聞きたかったの。このゲームの目的って、何？」

「目的？」

「ええ、あるでしょ」

「この殺人ゲームニ・・・かイ？」

「うん」
「人口ノ、削減・・・ダ」
「・・・どういうこと？」
「真面目な話ヲ、しよウ」
「はい」

人口は増えすぎて、抱えきれなくなった。地域によれば、食料もなく飢饉に陥っている。環境も悪化して、人も住めなくなっている。
世界的に、人口密度も高まっているのに。暮らせる場所は減る一方。
政府として面倒を見切れない、人の数。しかし、政府として直接的に手を下すことは出来ない。違法であるのだから。
だから、混ぜた。ワクチンなどの、予防接種の中に。とても小さな、小さな電子媒体。それによって、コンピュータから選ばれた人間たちが、無作為に、このゲームの犠牲者になる。
それが、このゲームの裏面。真実の局面なのだ。

「１９８０年カラ、この計画は行われているのだヨ。先進国の全てデ」

小さな影（前書き）

セカンドステージの舞台は、あの有名な
廃墟ファンの永遠の憧れ、摩〇観光ホテルでございます。
あ、なんか分かっちゃいますね・・・
素敵ですよね、〇耶観光ホテル。
もう隠す気はないですｗ

小さな影

ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ・・・
かくれんぼ。僕を探さないで。僕、今隠れているところなんだ。声をかけちゃだめだよ、おしゃべりしちゃだめ。鬼さんにバレちゃうでしょ。
ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ・・・
あれ、可笑しいね、また1から数えているよ。ヘンなの。
ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ・・・
まただよ。また数えてるよ。次はいっつ。
『みーちゃん、みーつけた』
――――――・・・誰なんだろう、このおじさん。僕、知らない。

随分、寝ていたのかもしれない。まるで、頭の後頭部を打ち付けていたかのように、痛い。脳震盪を起こしたかのように、深くがぐわんぐわんと、回るような錯覚を覚えた。
半身を起き上がらせると、そこは今までと違った空間だった。
廃墟であることに変わりは無いのだろうが、随分と綺麗だった。工場というより、何かの建物の中のようだ。大きな窓があるあたり、以前は随分おしゃれだったんだろうな、と。いらない想像をしてしまう。窓の格子の向こうに、綺麗な緑が広がっていた。芽吹く緑。ああ、そういう季節だったのか。随分なところに着てしまったものだと、考えていた。
一瞬、脳裏を過った、赤い光。
泉水(いずみ)、そうだ。彼女は一体、どこに。
辺りを見渡せど、何も見えない。光の差し込む、広い空間に自分

以外の気配など、ない。昼間の光に照らされた、うすらぼけたシャンデリアみたいな照明が、妙に気に障った。彼女がいないと知った瞬間、何か分からない感情が、自分の中でふつふつ湧いてきたのだ。まるで、この現状に腹を立てた”殺人鬼”が、人を殺しに行く前みたいに、むしゃくしゃしたみたいな。手が震える。わなわなと、まるで、無い凶器を探しているかのように。

可笑しい、可笑しい、可笑しい、可笑しい――――――――――・・・・。

「あああっ――――――・・・」

狂ってしまいたい。

一面、窓ばかりの何もない部屋だった。

目を開けた瞬間、割れたガラスの隙間から入り込む風に、どこか懐かしさを覚えた。自然の中にいるかのような、風の匂い。何にも汚されていない、匂い。ああ、いつか祖母の家に行ったとき、こんな匂いがしてたっけな。懐かしい気持ちで胸が一杯だったけれど。

辺りを見渡して、思い出した。そうだ、まだゲームの中。まだ、閉じ込められたまま。私は、ゲームのキャラクターのまま。

意味をなくし、放置されたテーブルに手を滑らせれば、指先にはうっすらと埃がついた。どうやら、随分とこびりついているらしい埃は、そう簡単にはとれないらしい。

いつの間にか、足元は裸足だったし、服も変わっていた。

ああ、そっか。ゲームの中だから。ステージも変われば、装備変更もあるのかな。そんな暢気なことを考えながら、テーブルの周りをうろつく。

『タッタッタッタ・・・』

不意に部屋の外から、まるで小さい子供が走るような足音がした。

気味が悪かったが、気になるものは気になる。扉の無い、扉の格子に手をかけて、外を覗き込んだ。思った以上に薄暗かったが、その影はすぐに分かった。

向こう、もう少しいったところに明らかに人間がいる。小さな、男の子のようなシルエット。

「・・・ねえ、そこにいるのは、誰？」

大きな声で話しかければ、私に気付いた影は、脅えたように身を隠した。近くの壁に張り付くようにしてこちらをのぞきこんでいる。

「私、怪しいものじゃない・・・竜子（たつこ）っていうのよ、泉水竜子（いずみたつこ）。ぼうやは？」

「ぼうやじゃないよ・・・」

聞き取りづらい、小さい声で否定の声が聞こえた。

その影は、私が怪しいものじゃないと思ったのか、ゆっくりと立ち上がって近づいてきた。

光が差し込む窓の前に、差し掛かったときにはっきりと顔が分かった。随分と綺麗な顔立ちをしている。綺麗、といっても、どこか女の子のような雰囲気さえ感じる。中性的な顔立ちは、愛らしさがあったが、ここには不似合いだった。

「名前は？」

「尊（みこと）・・・武尊（たけるみこと）・・・」

「尊（みこと）・・・くん？」

「うん。皆、みーちゃんって呼んでた」

「じゃあ、みーちゃんでいい？」

「うん・・・ねえちゃん、どうしてここにいるの？」

「・・・分からないの」

「僕も分からないんだ。さっきはなんか、工場みたいなところ居たけれど、気がついたら、あそこにいた」

指差す先には、ぽっかり口をあけた、空間があった。

「あそこの先には・・・」

「お風呂だと思う。お風呂みたいなところだった」

「そう・・・」
「暗かった・・・」
よっぽど心細かったのか、ぎゅっと、袖を握ってきた。
「・・・私も人を探しいるの・・・一緒に行く？」
「うん」
小さな男の子の腕を引いて、私は歩き出した。
「みーちゃん、いくつ？」
「１２歳」
「そっか」
「うん」

残酷なゲームに、情けもなにもないんだ。ただ残酷に翻弄されるだけ。さあ、幕開けですよ、スタンバイ、ＯＫ？

小さな影（後書き）

こういう小説描くとき、高橋洋子さんの曲はＢＧＭにサイコーです。
（こぼれ話）
今日は夜明け生まれ来る少女を、ヘビロテ。大体、１０回以上は再生しますねえ・・・描き終えるまでにｗ遅いんで、書くの。

占領されていく脳（前書き）

プレーヤーの家族構成

主人公

長男★哲哉（てつや）

次男★順次（じゅんじ）

母★専業主婦をしています

父★警察署勤務。

占領されていく脳

時計が静かに、２０時を告げた。現在は、２０１４年６月１５日。あれから随分と眠っていたらしい。

ディスプレイには先ほどと、少しも変わっていない文字が映し出されていた。眠りすぎたかな、と思いもしたが。

しかし、こうも眠っていては、腹も減るものだ。台所に行って、何かもらおう。そう思って、まだ寝ぼけた頭のまま、一階に降りて行った。

リビングからは、テレビの声が漏れてきていた。どうやら誰かはいるらしい。

「おかえり・・・」

「あら、哲哉（てつや）、電話したのよ。いたなら出てくれればよかったのに」

「え？寝てた」

「・・・順次（じゅんじ）がね、熱出したから。熱さましのシートあるかどうか、見て貰おうと思ったのよ。まあ・・・買って来たし、丁度無かったからいいけれど・・・そう、寝てたの」

「・・・うん」

「お腹減ったの？そこに作ってあるわ。さっき出来たところ・・・食べちゃいなさい」

「・・・ありがと」

まるでマシンガンみたいに、一気に喋ったあと、母は順次（じゅんじ）のところに行った。久々に、弟のやつが熱を出したらしい。昔から、少し病弱な気はあったが。この頃は大丈夫だと思っていたのだが。

テーブルの上には、相変わらずの芋料理。どうやら最近、近所から頂いたらしいジャガイモが、台所の隅に袋に入ったまま放置されていた。ジャガイモもキライじゃないけれど、こうも続くと一工夫（ひとくふう）、欲しいものだ。皿の上のポトフは、相変わらずいい感じに仕上がっ

ているところは流石（さすが）、というべきか。
「ただいま」
「あ、おかえり」
「・・・母さんは？」
「順次（じゅんじ）んとこ。熱出したって、あいつ」
「ああ、そうなのか・・・」
「父さん、今日遅かったね」
「まあ・・・あれだよ・・・最近、失踪者が多いからな・・・書類の整理に追われてたんだ・・・お、今日は肉じゃがか」
「ポトフだよ、父さん」
「似たようなもんじゃねえか」
「あら、お父さん、お帰りなさい」
「おう・・・順次（じゅんじ）の様子は？」
「病院は？」
「まだ下がってないのよ・・・可笑しいわね」
「昼間連れて行ったんだけれど、風邪だって・・・」
こういうとき、妙に取り残されたかのような、そんな錯覚に陥る。
口に放り込んだ、ニンジンの味も、なぜかしないような気がした。
なんだか妙に、寂しい気もする。
味もしない飯を口に放り込んで、さっさとテーブルを立った。
「ごちそうさま」
「はーい」
母は、相変わらず何かに追われているらしい。こんな歳でいうのもなんだが、妙に面白く無いものだ。

小さな男の子の手を引き、廊下を進んでいった。
階段はのぼるのも、下るのもあったが、下るのは妙に怖くって。
考えずとも、のぼりの階段に足をかけていた。

階段を上ると、そこには大きな空間があった。どこかおしゃれな体育館のような。ああ、分かったホールだ。催し物をするための、ホールだったんだろう。さしずめここは、宿泊施設か、なにか。

そんなことを頭の中で考えていたら、尊(みこと)がぎゅっと手を握ってきた。

「どうかしたの、みーちゃん」

「・・・ねえちゃん・・・音がする・・・」

「音？」

「・・・ねえちゃん、聞こえない？」

「・・・」

耳を澄ませてみれば、聞こえるような気もする。廊下のほうだろうか、階段のほうだろうか。こんなに光も通されて、見通しもいいのに。どうしてどこから音がするか、分からないのだろう。

『ガガガーッ・・・ガガガーッ・・・』

まるで、金属か何かをひこずってるような、そんな引っかいたような音。

「ねえちゃん・・・」

尊(みこと)は、さらにぎゅっと手を握った。怖いのだろう、脅えは伝わってきた。

「大丈夫よ、きっと」

そういって、尊(みこと)の背を撫でてあげたものの、私も正直、怖い。見えないこと以上に怖いものなど、きっとないのだろう。目線は定まらず、目の先で必死で影を探していた。こんなときに、先輩がいたら。

『ガガガーッ・・・ガガガーッ』

音が、近づいてくるようだ。

微笑む死神

セカンドステージで変わることがある。根本的なルールは変わらないが、あるキャラクターがエリア内をうろつき始める。

操作可能なキャラクターは1人、増員される。つまりこのステージでは4人。5人が揃ってイベントが発生するという条件は満たさない。

しかし厄介なのが、そのエリア内に現れる操作できないキャラクターだ。

通称を『ヘヴンズリーパ』。意味はそのまま”天国の死神”である。この殺戮の地獄絵図から救い出してくれる、行動パターンの読めないキャラクターだ。ヘヴンズリーパはセカンドステージの始まったその瞬間より、勝手に動き始める。大きな奇妙な形の斧をひこずっているため、その行動速度自体は遅い。しかし、獲物を一度見つけると、それを殺すまで追い続ける。文字通りの死神なのだ。

ヘヴンズリーパが仮に、1人殺し、操作可能なキャラクターが減ったとする。現段階の人数は4人であるから、これが3人に減ったと仮定しよう。

もし、この条件下におかれれば、厄介なイベントが発生する。操作可能なキャラクターが自動的に5人まで増員され、強制的にイベントを発生させられるのだ。イベント自体はシステムの中に組み込まれた、アクションの中から無作為に選ばれる。そのため、吉と出るか凶と出るか、分からないのだ。

つまりプレイ中に、ヘヴンズリーパがどう動き、プレーヤーがキャラクターをどう操作するかによって、この局面は大きく変わる。

ちなみにニセモノのディスクでプレイした場合の、このステージでの失敗率は78パーセント。ほとんどの者がヘヴンズリーパに殺され、強制的にイベントが発生してしまうのだ。そして、そのイベントがマイナスのダメージの大きいイベントであった確率は、55

パーセント。

哲哉（てつや）は自室に篭った後、携帯のディスプレイに釘づけだった。
セカンドステージについての掲示板は、どこも活発に書き込みがされていて、レスの数も半端ない。既に、７００を超えているところもあった。
哲哉（てつや）の目が、ある掲示板でふと、止まった。

２２《２０１４年５月１０日　午前１時００分
やばいヤツが出た。攻略法分からん。なんかうろついてる。　ｂｙ名もなき戦士》

２３《２０１４年５月１０日　午前１時０１分
ヘヴンズリーパ？そいつは操作できないから最悪だ・・・　ｂｙアザピー》

２４《２０１４年５月１０日　午前１時０５分
どうしたらいいのか分かるか？教えてくれ　ｂｙ名もなき戦士》

２５《２０１４年５月１０日　午前１時１１分
私、気がついたら勝手にイベントが発生していてゲームオーバーになった。どうしようもない　ｂｙきらら》

２６《２０１４年５月１０日　午前１時１６分
俺も同じく。気がついたら条件満たしてて、変な画面になった。ファーストとはレベルが違う！これはやばい。　ｂｙアザピー》

２７《２０１４年５月１０日　午前１時２２分

ちょっと、可笑しい。やばい。　ｂｙ名もなき戦士》

２８《２０１４年５月１０日　午前１時２７分
どうした？　ｂｙアザピー》

２９《２０１４年５月１０日　午前１時２８分
何が起こったの？　ｂｙきらら》

３０《２０１４年５月１０日　午前１時３５分
イベントが発生した。新しい条件が設定された。１０分おきにひとり増えていく・・・１０人になった時点でゲームオーバーだ・・・もしキャラクターのうち操作していないものが、このステージでアイテムを勝手に手に入れれば、ゲームオーバーだ・・・くそ・・・
ｂｙ名もなき戦士》

３１《２０１４年５月１０日　午前１時４４分
やっぱり、違うんですね・・・噂は本当だった。この最悪なイベントって、無作為にシステムの中から選ばれるそうですから、それがラッキーかアンラッキーかって、紙一重らしいですよ。気をつけて・・・だから何が起こるかなんてわからない。　ｂｙ地獄の死神》

イベントが発生するかもしれない。哲哉（てつや）の視線が、パソコンの画面に向けられた。相変わらずの画面。もしかすると、もうどこかで、そのヘヴンズリーパは殺戮を開始しているかもしれないのだ。ファーストステージは終わっているのだから。ありえない話ではない。
もし、もう誰かが殺されているならば、最悪だ。ここまで折角クリアしたのに、ゲームオーバーになってしまう。
慌てて、パソコンの前に座ってプレイを開始した。
嫌な予感は当った。画面の隅に、赤い文字で『ヘヴンズリーパ移動中』が記されていた。もう既に、最悪な局面へのナビゲーション

は始まっていたのだ。

支配された一時（前書き）

ファーストステージでは可愛らしい制裁者、エリーゼ。（これは自信作♪けれど描くのメンドイ・・・こだわりすぎたw）
セカンドステージではこの上なく恐ろしい死神、ヘヴンズリーパ。
早くヴィジュアルを決めないとなあ・・・

支配された一時

まるで時が止まったみたいだった。
動いちゃいけない。頭の中で警告音が激しく、鳴り響いていた。
服の裾をつかむ、尊(みこと)の存在も頭の隅に追いやられそう。
『ガガガーッ・・・ガガガーッ』
出て行っちゃいけない。ここから逃げなければいけない。けれど音はしきりに、その出入り口の方角からしている。その音は段々、近づいてきているような錯角さえ起こさせて。痛いほどに鼓動打つ、心臓の音が耳の奥にあるみたいに聞こえる。
「ねえちゃん・・・」
「大丈夫・・・きっと・・・」
見つからなければ、もしかするとどうにかなるのかもしれない。早く逃げ出さなければ、生きていられないかもしれない。あの音は、不審者――――・・・もし仮に不審者程度なら、ここからの出口を・・・。
ない、絶対にない。不審者なら、寧ろ歓迎すべき。こんな閉ざされたおかしな空間に、外部から進入できるはずが無い。
『相変わらズ、勘のよろしい方ですネ、あなたハ』
「っ!?」
唐突に聞こえてきたのは、もう会わないと思っていた、あの管理人と名乗る男だった。
『あれハ、死神の鎌の音でス。大鎌。心配要りませン、彼は今あなた方の存在に気付きませン』
「どうして?」
『ボクがこの空間を切り離したからですヨ。そうでもしないと、説明できないでしょウ。生きていたいでしょウ?』
「・・・」
『鎌を持っている死神ハ、ゲームのキャラクターでス。いわばオ

フィシャルキャラクター。最初からこのゲームに存在しているのデ、誰も操れません』
「・・・え」
『しかし彼らは殺戮をする命を受けテ、ひたすらエリア内をうろついていまス。ターゲットはあなた方、４人ですヨ』
「・・・４人？」
疑問に顔をしかめた私をみて、ミスターブラッドは薄気味悪く笑ったように見えた。
『あなた方以外ニ、あと一人存在しているのですヨ』
「・・・」
『ターゲットがそれだけいれバ、身代わりなどいくらでもあル・・・あなたが生き残るチャンスもぐんと増えまス。リスクも軽くなル。生憎彼はネ、大鎌のせいでそれほど早く歩けないシ、走れなイ』
「・・・」
『見つかったら最後でス。死ぬまで彼ハ、ターゲットを追いまス。ひとつ忠告しまス。彼を殺そうなんて馬鹿なことは考えないで下さイ』
「殺せないの？」
『はイ。しかシ、閉じ込めて時間を稼ぐぐらいなら可能ですけれド。リスクはぐんっと上がりますヨ。もし姿を見られでもしたラ、彼は覚えて脱出した後は追うでしょウ』
「・・・どうしたらいいの」
『彼の名はヘヴンズリーパ。エリア内には彼、ただ一人しか存在していませン』
「・・・」
『良く考えてくださイ。操られていない間にネ』
「・・・（そうよね、ゲーム内だった・・・操られるリスクもあるんだ）」
『彼、生きているといいですネ』
「彼？」

『彼ですヨ・・・あの青年』
「っ・・・どこなのっ・・・」
『さア？それではボクはこれにて失礼しますかネ』
「ちょっ・・・」
まるで霧が晴れるみたいに、ミスターブラッドは直ぐに去った。
残ったのは、私と尊（みこと）と、あの気味の悪い死神だけ。
『ガガガーッ・・・ガガガーッ』
ひたすらに鎌をひこずる、その音だけ。

気を紛らわせるものなど、何もなかった。
誰もいない、この廃墟を彷徨っても、何もない。朽ちた木屑やら、コンクリートの塊に落ちたダクト。まだ日の昇った昼間でよかった。辺りが見渡せるのは、恐怖心やらパニックやらを和らげてくれるらしい。
普通に暮らしていただけでは気付かなかった、意外な光の効果に驚きつつも、どこかで安心を得ていた。
廃墟の中にあった、見慣れたジュースのロゴが入った大きなケースを目にした。不思議と、どこか現実味がなくって。これが仮想空間なのに、こんなのがあるのは可笑しいって。頭の中で処理し切れなかった情報は、少しばかり混乱させた。
『パキッ・・・』
背後で木屑を踏んだような、そういう音がした。勢いよく振り向けど、人影がちらついたような雰囲気がそこに残っているくらい。
また、同じような恐怖心が支配する。誰だ、あの子か。それとも、誰かか。
「（出てくるなら早く出て来いよ）」
ひたすらに、視界を広げようと。視野をなくそうと、目は宙を泳

ぎ続けた。

支配された一時（後書き）

今日のＢＧＭは高橋洋子さんの『魂のルフラン』でした～♪
ほぼこれを聴いて書いてました。
文章もすらすら進む～☆

若干、聴いてた『心よ原始に戻れ』もいいですね

恐怖の真実（前書き）

岩崎の下の名前を決めていたけれど、もうどこかに書いているのか、
書いてないか忘れた・・・
読者の皆様、ちょっと助けて（笑）
覚えていらっしゃいますかね・・・どなたか。
岩崎って・・・岩崎〇〇くんだろうけれど
下の名前って何でしたっけ？
馬鹿な作者でごめんなさいw

恐怖の真実

どうしても、気になって仕方が無かった。だから画面を立ち上げて、さっそくプレイを再開した。

ゲームはセカンドステージの説明の画面で止まっていた。あの掲示板の書き込みを見てから、ずっと気がかりだった。

それだけじゃない。目にしていた掲示板と違うことが、このゲームに起こっている。このディスクには市場に出回っているものと、全く違うデータが入っている。多分、この勘は正しくって、気のせいなんかじゃない。

しかも目にしていた名前に既視感（きしかん）を抱いていたのは、紛れもない本当のことだったんだ。

やっと気付いた。あの名前――――・・・泉水竜子（いずみたつこ）、武尊（たけるみこと）・・・そして、あの岩崎（いわさき）という男も。おそらくは、あの菅原（すがわら）という男も同じだろう。もっと早く気付けばよかった。

新聞の一覧には新たに『失踪者捜索』の欄がもうけられていた。あの４人の名前は、今日の朝刊にしっかりと記されていた。身体的特徴も、一致する気がした。

その驚きは声にもならなくって、正直、戸惑っていた。

『ピーッ・・・ピーッ・・・ピーッ』

そのとき、まるで呼び出音みたいなメロディーが突然、鳴り始めた。何も操作していない、可笑しい。恐怖と好奇心半分に、パソコンのディスプレイを眺めていたら突如、変わった。

《詳細確認》

ただ、真っ黒な画面に赤字で、そう浮かび上がってきた。これを押したら、もしかすると全て今までの情報はパーになるかもしれない。けれども、押さずにいられなかった。気になってしまったから。恐る恐る、カーソルを近づけて、クリックした。

《あなたが操作しているのは実際の生身の人間です》

「っつ――――――・・・！？」
声にもならない声が、漏れでた。
《彼らをこの空間から解放する為、助ける為、クリアしてください》
選んでいる余地など、なかった。

あの木屑を踏んだような音がしてから、随分と経ったかも知れない。あたりは何の変化もなく、ただ荒くなった自分の呼吸音だけが、いやに耳に張り付いていた。鼓動が苦しいくらいに高鳴っている。張り裂けそうだ。心臓はまるで頭に入っているかのように、うるさい。
出てくるなら出て来い。ただの猫騙しみたいな、強がりじゃない。早く心臓の音を鎮めたい。出て来い、出て来い、お願いだから。
『パキッ・・・』
「誰だっ」
もう耐えられなくなって、声を出してしまった。また変なものだったらどうするつもりなんだ、自分は。後先を考えなかったことを、少し後悔した。もし厄介なヤツだったら、自分は死ぬ。この負のスパイラル、恐怖の時間から解放される。上手くいけば、解放されるかもしれない。
もうすでに、自分しか見えていなかった。
「・・・驚いた・・・迷ってた？迷子なんだ、俺」
「はっ・・・は・・・」
予想外なところから出てきたのは、『俺』と言っているものの、どうみても女だった。ショートカットで一瞬、優男かと思っていたが、そうじゃない。胸のふくらみは、女の物以上、何物でもなかった。
「・・・すまなかったって・・・驚かせて」

「・・・ああ、驚いた」
「俺、王知美(ワンヂーメイ)・・・」
「は？」
「在日中国人なんだ・・・留学生だけれど」
「ああ・・・え？」
「日本に留学しに来た」
「ああ、それは分かった・・・え？」
「だから・・・俺は」
「あ～・・・待って・・・何て呼べばいい？」
「・・・好きに呼んでよ。皆、メイって呼んでる」
「・・・じゃあ、メイさん」
「あんたは何て？」
「岩崎(いわさき)、そう呼んでくれればいい」
「そう」
戸惑ったような、そういう目の色をしていた。メイは、まだ辺りを見渡していた。落ち着かないのも当たり前か。
「どうしてここに？」
「俺が聞きたい」
「俺はわからない」
「・・・岩崎(いわさき)はどうして、ここにいる？」
「・・・」
正直に言うべきか、どうか迷った。これはゲームの中の空間だと、告げるべきかどうか。
「気がついたら、ここだったんだよ、俺は」
「・・・俺もそんな感じだよ」
どうやら、同じらしい――――――・・・気がつけば、この空間に放置されていたという訳か。理由も分からないままに、キャラクターになったというんだから。これ以上、何も知らないほうが幸せというものだろう。

恐怖の真実（後書き）

４人目登場！無作為に選んでいる設定ですから、こういう方がいらしても可笑しくはないかと。この設定画も近日公開！

最悪の決断（前書き）

今、すっごい雨風
（ＡＭ３：３９）↑ＮＯＷ

最悪の決断

ひこずっている音はずっと止まらなかった。まるで犠牲者でも探しているかのように。

『ガガガーッ・・・ガガガーッ』

上がっていく心拍音も、呼吸数もまるでフルマラソンの後のようだ。音が耳に張り付いたかのような、錯覚を覚えた。もしかするとこれは、幻聴じゃないのかと思う反面、そうであって欲しいと切に願っていた。

「・・・ねえちゃん・・・どうしよう」

ぎゅっと、尊(みこと)が服の裾をまた一層強く握った。

「・・・みーちゃん」

「何？」

「かくれんぼ、しようか」

「え」

尊(みこと)の顔が少し暗くなった。当たり前の反応かもしれない。こんな最悪のところに、置いて行かれるかもしれないのだから。

「あそこの壁の後ろにしよう」

「ねえちゃんっ」

壁のくぼみ、ちょうど小さい子なら隠れられるくらいの陥没部分があった。

「大丈夫よ、きっと助けに来るわ」

「・・・」

「できる？」

「・・・うん」

「いい子。強いね、よし・・・さあ、早く」

返事をするまもなく、尊(みこと)はすっぽりとその穴に入った。よかった。丁度暗がりになって、あまり分からない。

問題はここから。この手段しか賭けはない。それに上手くいくか

も分からない。なんたって、速さが分からないのだから。
私が、おとりになる。姿を見られようと、尊(みこと)みたいな幼い子が辛い目にあうことを考えれば、構ってられない。元々、いつ死ぬか分からないんだ。ここでへばっても、あの子が生きてさえすれば――――・・・。
そう願って、勢い良く隠れていた場所から走り出した。わざと、大きな音を立てて。
しかし、先ほどまでの決心はすぐに揺らぎそうになった。ヘヴンズリーパは思ったより背丈が大きく、それに鎌も想像していたよりもとても大きかったから。こちらに勢い良く、振り向いた。
その瞬間から、覚悟は決まった。私はこれでもう、逃げ切ることはできないだろう。残りの3人の為に、この命を張ろうと。
不幸中の幸いか、ヘヴンズリーパは出入り口付近から遠ざかっていた。
出入り口から下に降りるとき、そっとヘヴンズリーパを振り返った。あれの歩く早さは、多分、松葉杖に頼って歩く人くらいの速さか。思っていたよりも早い。油断してはいけない――――・・・額に脂汗のような汗が噴き出してきた。

廃墟の中を移動中。ふとした瞬間に気付いた。どこからだろう、走る音がする。しかもかなり近い、その音は反響して、ここまで届いているようにも感じる。
一度、立ち止まってよく音に耳を澄ませてみた。
間違いない、この直ぐ下あたりだろう。さしずめ、泉水(いずみ)か。
「どうした?」
「足音が聞こえないか」
「・・・聞こえる」
「言ってた、俺の後輩かもしれない・・・助けるつもりだ」

「手を貸す」
「ありがとう」
「・・・下、か」
「ああ」
「・・・おい、あそこ」
王(ワン)の指した先には、大きく床が抜け落ちた箇所があった。そこだけ大きく陥没し、この様子だとこの下の様子は、もしかすると見えるかもしれない。
近寄っていくと思っていた通り。人一人くらいなら、通れそうなほどの穴だった。小柄なあいつだったら、問題ないだろう。
そしてもうひとつの勘もあたった。泉水(いずみ)の走ってくる姿も見えた。何かに追われているように、まるで何かに脅えているかのように、走っていた。
「泉水(いずみ)」
「っ」
「上だ、上を見ろ」
「・・・先輩」
「ほら、掴め」
「・・・でもっ」
「助けてやるから」
泉水(いずみ)はまごついた様子で、少し来た道と俺を見比べていた。
『ガガガーッ・・・ガガガーッ』
すぐに奇妙な音がし始めた。泉水(いずみ)の顔が青くなっていく。
「どうしっ・・・」
「おい、お前一人くらいどうってことない。早くっ！」
「・・・でもっ」
「理由は後で聞く。早くっ」
「・・・巻き込みます、ごめんなさいっ」
「ここに来たとき、もう巻き込まれてる・・・これ以上、何に巻き込まれるんだっ」

伸ばされた手を、勢い良く引っ張りあげた。

>i38178|2852<

すぐに引き上げた泉水(いずみ)の片手を、王(ワン)がつかんで、安全なところまで導いた。

「大丈夫？」

「・・・ありがとうございます」

「行くぞ、2人とも」

「はい」

「先輩、今――――・・・」

「管理人が来た、ついさっき。ヘヴンズリーパ、だろ？」

「・・・そうです」

「急ぐぞ、1階はだめになった、ここも危ない・・・三階に行くぞ」

「・・・はい」

若干残る恐怖心に、足が一瞬がくっとなった。

「泉水(いずみ)さん、行こう」

「はい」

王(ワン)が差し伸べた手を握り、先輩の後に続いた。

一階からはまだ、あの音がしていた。

動転する

それはあまりにも混沌として。分からなかった。何が本当で、さしずめ何が嘘だったのか。あの新聞欄のことも。まるで嘘のように、キツイ現実。今見ているものは、一体何なのか。理解できない。

切り取った新聞の失踪者捜索の一覧。マーカーで印までつけたんだ、これは本当だろう。ああ、気持ち悪いくらい、くらくらする。

どうすればいい。あの人たちを救う為に、プレイを続けろって。けれど攻略法が本当に分からない。頭がいつも通りに働こうとしない。ああ、怖い、けれど続けないと助からないって――――――・・・・嘘だろ。

「ああっ・・・どうすりゃいいんだよっ」

激しくベットを叩くと、それと同時に扉が開いた。

「・・・何してんのよ」

「・・・別に」

「ちょっと買い物行って来るから・・・お願いね」

「分かった」

内心、それどころじゃないって。そんなことに構ってる時間はないって。言いたかった。母さんが握っているのは、今は看病中の、ひとりの命だろうけれど。俺はそれどころじゃない。４人なんだ、ひとりなんかじゃない。重たい、命の大きさ。もし、殺しても、もし死んでしまっても。多分、捕まらない。これはゲームだし、彼らは失踪者。けれど、自分が殺人を犯したという事実を背負ったまま生きていけるほど、鈍感じゃない。図太くは無い。痛いくらいに、その重さを今感じている。

身体はベットの上でリラックスしているはずなのに、手にも額にも体中から汗が湧き出ていた。まだこんな季節だというのに。

ああ、ごめんなさい。俺がこんなゲーム、買わなきゃ良かったかもしれない。そうしたら、もしかすると巻き込まずに済んだかも。

好奇心だったんだ。
「ごめん・・・」
誰に言うまでもなく、伝える相手のいない謝罪をただ、小さく繰り返した。怖い、もし失敗したら。それを考えると途方もなく、恐ろしい。ああ、怖い。手汗が、半端ない。まるで水の中に手を入れたままのようだ。どうしてしまったんだ、俺。
「・・・っ・・・どうすりゃ、いいっ」
『プルルッ・・・プルルッ』
まるで救いの手のように、それは鳴った。電話をかけてきたのは、友人だった。一番、親しい友人。
「もしもしっ」
『・・・もしもし・・・あ、忙しかった？』
「いいや・・・なんか・・・」
『いや・・・ちょっと聞きたいことあったんだが・・・いいや・・・後で・・・すまない、邪魔したみたいで』
少し気圧されてか、友人は引っ込みがちに、そう言った。
「あ、待って・・・お前、ブラゲ、知ってるか？」
『・・・ああ』
「クリアしたか？」
『クリア？いいや、諦めた。セカンドでダメになって・・・また一からやり直しだぜ・・・セーブもできないんだ・・・面倒くさくって、やってられなかった』
「・・・やめたのか」
『ああ、うん・・・だって、さして面白くなかったし・・・』
「・・・」
『どうした？』
「お前・・・人の命を操ってるんだぜ・・・」
『は？』
電話口から聞いたことのないような、怪訝な声が聞こえてきた。
「どうしてそう、すぐにやめられるんだよ」

『・・・どうかしてるよ、お前・・・』
「お前のほうだよっ」
『・・・少し休めよ、お前・・・寝てないんだろ・・・じゃあまた後でかけるから』
「あ、ちょっ」
すぐに電話は切れた。
あいつは勘違いしたようだった。まるで俺は徹夜明けで、気が可笑しくなってるみたいな。そういう変人扱い。
腹が立つ、無性に。意味もなく。クリアする方法を、誰か知ってるんじゃないのか。知りたい、教えてくれ、誰か。
多分、もう普通じゃいられない。きっと、可笑しくなっていく。落ちていく感覚が濃く、背筋を這い登ってくるようだ。ぞくぞくとする。鳥肌でも立ったかのように。それはくっきりとした濃い感覚で。
「・・・誰か・・・」
《プレイを再開してください》
ディスプレイには冷徹なまでの、その文字。
分かってる、分かってるけれど今できる状態じゃない。
《再開してください》
うるさいくらい、リプレイされるその文字の羅列。
《再開制限時間あと5分》
「くっそ・・・」
《再開しなければゲーム内の人たちは皆、抹殺されます》
「・・・っ」
《再開してください。あと4分22秒》
もう、向うしかないじゃないか。攻略法も分からないというのに。
もうがむしゃらに、もうやけくそに。俺は画面に向った。

ある死刑囚の存在（前書き）

岩崎先輩の名前、決定しました。
岩崎博美（いわさきひろみ）です。
男ですけれど、結構、柔らかい雰囲気に仕上げました！

ある死刑囚の存在

これは世の中のための制裁で。こんな莫大な人口を抱えていては、皆が飢え死にしてしまう。野垂れ死んでしまう。あるサミット、非公開の会議で持ち出された話があった。どこからともなく、誰からだっただろう。

『うちは最近、こんなに人口が増えまして』

『いやいや、あそこが輸出入を拒否しちゃったでしょ・・・うちも赤字・・・』

『一層のこと口減らしでもできたらいいのに』

まるで井戸端会議のように、ぽんぽんとこぼれ出てくる、軽い愚痴。

やれ、お前のところは後進国であるからさほど心配ないだろう。ああ、先進国も大変なんだな。お互いが、見たこともないくらいに打ち解けて話し合っていた。

誰だっただろう。覚えていないが、誰かがこういった。

『ああ、そうだ。ゲームを作ってみてはどうだ?』

その国には、とても重い刑の犯罪者を見張る為に開発された、とても小さなチップがあるという。体内に入ると、それは一種の電気ショックのような刺激をもたらす。そのチップが注射器を介し、血管から脳に届く頃、その実験が行われた。

ある国の、死刑囚がいた。男は、27歳であったが、すでに国家史上類をみない、残酷なテロリストであった。男に従ったものは、千人を超え、それは民衆を恐怖のどん底にも陥れた。表向きは、その死刑囚は死刑執行が行われた。

しかし、彼にはある身体的特徴があった。異常なまでの、拷問への耐性であった。

そこで彼はその実験に、用いられた。もし、電流を流しすぎて万が一があっても、記録上はもう亡くなっているのだから、問題はな

い。
研究者たちは考えた。脳内の信号を傷つけずに、なおかつ意識を操れる刺激はないのだろうか。数ヶ月、さまざまな刺激を、そのチップを介し、男は浴び続けた。
そして、ついに見つけた。その刺激は、ほかの死刑囚でも同じように行われた。試行錯誤を繰り返し、できたチップは、やがて先進国に売り飛ばされていった。チップと技術をあわせて、それは数千万にもなるものもあった。あるものは、予防接種の類に。あるものは、サプリメントなどの類に。活発に売りさばかれ、それは世の中に氾濫した。今、そのチップを体内に持たない者は、先進国の中には少ないだろう。
それぞれ、脳に刺激を発生させるサインは、その埋め込まれた体内で、チップは一種の独自の意思を持ち適応した。そしてそれは、国のトップシークレットの事実を握る、その数十人のみが立ち入れる部屋で、全ての信号が管理されていた。
空間が独自に存在しているのではなく。それは大掛かりな、いわば、誘拐の類であった。
そして、その中でその対象のチップの情報を埋め込んだディスクを、世の中に流通させた。それは一度は必ず、国家に戻されその部屋でチップデータの交換の行われた後、市場にリリースされていた。
電源を入れると、チップが反応し、対象者の脳内に自動的に信号を送る。それは軽い、偏頭痛とかそういう類の痛みをもたらす。そうすることで行動パターンを減らし、ターゲットを捕えやすくするのだ。そうして、捕獲されたターゲットは、ゲームに設定されている場所へ、放置される。そうして目覚めた瞬間から、死のシナリオを辿るのだ。
ある国では数千人の人口削減につながった。これは成功だと、それを幕きりとし、次々と執り行われた計画。それはやがて、じんわりと世界的な人口削減へとつなげられたのだ。
あるところでは、食糧不足が解消された。あるところでは、十分

な資源が届くようになった。そんな負のスパイラルを打ち消したような局面を見せた。
けれどもそれと同時に、それは新たなる、スパイラルをもたらしていた。
国家はまだ、気付かない。

『ねえ、僕』
『なに？おじさん』
『いいものあげよう』
『お母さんは知らない人から、もらっちゃだめだって言ったの、ごめんなさい』
『知らない人じゃないよ、お母さんの友達なんだ』
『ふうん』
『お母さんが預かってきたよ、これを食べてねって』
『何これ、ジュース？』
『そうだよ、いい子だね』
『・・・ふうん』

『竜子（たつこ）、さっさと飲んじゃいなさい』
『だって・・・これニガイのよ・・・あの病院キライ』
『全く・・・治るものも治らないわよ』
『はいはい・・・』

『はぁーい、知美(ヂーメイ)ちゃん、注射に行きましょうね』

『ねえ今日はテイクアウトなんだけれど、良い？』
『いいも何も・・・別にいいけど』
『ごめんね～、居候の身なのに、ちゃんと博美(ひろみ)の身の回りのことできなくって・・・部屋借りるときに約束したのにね』
『別にいいよ、俺だって子供じゃないし・・・それに別にいいよ、そんなこと』
『ありがとう・・・さあ、食べちゃおう』

きっかけは、そう、小さいことだった。何気ない日常に、潜んでいた悪魔の罠。そうして毎日、沢山の人間がチップを口にした。

紙一重（前書き）

ご心配おかけしました～。
もう大丈夫です
気持ちの整理がつきました。
ありがとうございました！
特にお兄様・・・ありがとうございました。

紙一重

誰だっただろう。偉大な人だったのか。それともゲームとか、そういう著作の一部だったのか。頭の中であるひとことが、グルグル回っていた。

『生きるも死ぬも紙一重』

その言葉が、妙に今しっくりと来る。まるで使い古した道具のように。馴染むのだ。

死んでいれば、いくらか幸せだっただろうか。妙な疑問が、くだらない疑問が頭を過る。けれどもすぐにその思考をかき消すものが目の前を過る。

この男――――――・・・数分前に出会ったこの男と、この少女の存在だ。

故郷の、幼馴染を思い出す。日本へ出稼ぎに行くといった日、彼は自分に少しのお金とお守りをくれた。多分、ゲン担ぎだとか、そういうことだったんだろうけれど。今は少し傷の入った、翡翠のブレスレットをいつも腕にはめている。いつも輝いている翡翠。美しい翡翠。自分の生まれた土地は、海に臨んだ土地だった。国内でも珍しい、人口の減りつつある地域であった。綺麗な海と、老人と、そして赤ん坊ばかりの奇妙なところだった。出稼ぎに出ていたのだ、若い衆は。

幼馴染もその後、すぐにシンガポールに行ってしまったと聞いた。元気でいるのか、どうかも分からない。音信不通の日々が続いていたが。ついこの数日、ふとした瞬間に思い出したばかりであった。

少女の手を引いていると、故郷に残してきた幼い妹や弟たちを思い出す。よくこうして、いろんなところに連れて行った。懐かしい、可愛かった、兄弟たち。

「犠牲を強いて・・・ごめんなさい・・・」

「？」

「彼女は中国の人だよ、泉水(いずみ)」
「あっ・・・えっと・・・？不起(ごめんなさい)」
「どうして謝る？」
口を開いたら、まるではとが豆鉄砲、食らったみたいな顔をした。
何て面白い子なんだろう。
「・・・？会(はなせますか)？日？？？」
「日本に出稼ぎに来てるから」
「・・・私、学校で中国語を勉強してました」
「そうなんだ」
「・・・はい」
「急ぐぞ、泉水(いずみ)、メイ！」
「はい」
急いで駆け上がったせいで、胸が大きく弾む。息が上がって、中々呼吸音を抑えられない。
それは皆同じようだった。
三階の部屋も同じように散らかっていたが、一階よりは光の差し込み具合もよく、見通しやすかった。相変わらず、階下ではあの音がしていたが、いくらか差し込む光がそれをやわらげてくれた。
「先輩・・・」
「どうかしたのか？」
「・・・私、おいてきたんです・・・」
「・・・」
「ヘヴンズリーパがどういうヤツで、どういうことをするか分かってますよね？」
「ああ」
「その目から逃す為に、私置いてきたんです」
「・・・」
「小さい、男の子がいます・・・」
「男の子？」
「・・・私、隠してきたけれど・・・今頃、どうなってるのか、

分からない・・・」
「・・・泉水(いずみ)さん、あなたの選択、間違ってない。心配したらいけない」
「・・・ありがとう・・・」
「俺たちでどうにかしよう、3人もいるんだから」
「・・・ありがとう・・・」
悲劇の中にも確かに、希望はあると。そう、確かに信じていた。

どうすればいいのか、分からない。どうすればいいのか。どうすればクリアできるとか、そういう易しいことじゃない。どうすれば、あの4人を救うことが出来るのか。
マウスを握る手に汗が滲む。ゲームでこんなに緊張したのは初めてかもしれない。ゲームでこんなにプレイすることがイヤだったのも、初めてかもしれない。
進まない気持ちと、それでもしなければならないという、義務にも似た気持ち。それは重く、重くのしかかっていた。
『哲哉(てつや)、いつまでゲームしているの？いい加減にしなさいよ』
「分かってるよ、もうすぐやめる」
『はいはい』
扉の前の、母の声が妙に非現実的だった。
プレイしたくない、何もかも忘れて逃れたい。逃れたい、こんなの、イヤだ。ゲームじゃない。
《あなたが握っているのは、人の命》
「・・・クッソ」
《人の命を代価として遊んでいるのは、君》
「・・・」
《早くプレイしないと次のキャラクターは――――――・・・》
「・・・っ」

《あなたです》
「ああっ・・・あ――――――っ」
パニックからか。どれくらい叫んだんだろう。家の中が静かで、嫌な汗が背筋を伝った。
皆、どうしたんだろう。誰もいない扉のほうへ、目線を向けた。
家は静かだった。

紙一重（後書き）

☆?不起・・・《読》ドゥイブーチー　中国語で、ごめんなさい。
☆?会?日???・・・《意味》日本語が話せますか?

私自身も就職先の都合で、中国語と格闘中。
早くペラペラになりたいな。

這い上がる悪寒

分からなくなってきた。どうしてこんなものを手にしたのか。思えば可笑しかったんだ。俺がこんなゲームに惹かれたこと。

俺は、今までゲームなんてまともにしたことがなかった。しても友人宅で、数時間とか。それくらい。はまり込むことなど滅多になかった。ハマっても、それは数日のことで。俺はそれよりも読書だの、映画だの、そういう方のほうが好きだった。それもこういう残酷なものではなく、そう純文学とか。そういう綺麗なものが、洗礼されたものが好きだった。

多分、父の影響だったんだろう。

だからこそ、可笑しい。こんなものに惹かれるなんて。

救い出す方法など分からなかった。けれど、その中でもひとつだけ明確なことはあった。多分、俺もあいつらも、この空間から早く抜け出したいはずだ。

それには多分、この手段しか残っていない気がする。

「・・・――――――――したら、多分、抜け出せるんだろ・・・？」

掲示板の、情報と失踪者の一覧、それから死亡者一覧の記事を照らし合わせた結果だった。たとえば、久留巳（くるみ）たつおという男。3月1日の記事では既に、失踪者一覧に名前が載っていた。けれどもその数日後の、3日の掲示板には、”久留巳（くるみ）たつおはプレイの邪魔をするのでどうしたらいいのか”という質問が投稿されていた。そして5日、新聞の死亡者一覧に、同姓同名の名があった。偶然かもしれないが、これしかないのかもしれない。

いや、クリアすればいいのか。

「・・・ムリだ・・・全員生きたままなんて」

ならば、俺は――――――――・・・。

まるで冷たい手で背筋を触られたような、そういう感覚だった。さっきからそういう感覚がずっとしている。可笑しい、まるで風邪の引き始めのような、奥の歯がガタガタという。

まさか、と一瞬疑ったが。

多分、この勘は外れていない。そうだ、外れていない。あの時と同じだ。竜子(たつこ)が、様子の可笑しかったあのときと、よく似ている。

「逃げろ・・・」

「え」

「逃げろっ、早く」

「行くよ」

「あ、ちょっ・・・」

竜子(たつこ)の手を引いて、メイがどんどんと遠ざかっていく。そう、それでいい。それで。

這い上がってくる感覚と、それからまるで世界の回るような錯覚に戸惑った。

「っ・・・」

いい、これでいいんだ。そう安心した矢先だった。俺は自分の目を疑った。銃が握られていた。俺の手に、ぴったりと張り付く銃。

いつの間に。

最悪の最中。そうして俺の意識は遠くなった。

高校時代、射撃で才能がめきめきと頭角を現した。よく、顧問の先生からはお前はオリンピックも夢じゃないなと、そういわれた。

大学時代、先生方の推薦で名門校に入学できた。いわば銃一丁のおかげで入学できたのだ。十発撃てば、全て十点圏内。それすらも

珍しくなかった。大会に出れば、必ず1位で、キラーとまで呼ばれた。同じサークルの仲間からも、ゴルゴだのなんだのとからかわれた。

けれど、それと同時におかしなことが起き始めた。いたずら電話だった。あの人が憎いの、殺して欲しい。そういう電話がちょくちょく、寮の内線で俺にかけられることがあった。名前を何ていったっけ。サツイさんとか言っていたっけ。

『薩摩の薩に、伊藤の伊です・・・薩伊・・・お願い、殺して欲しい人がいるの・・・』

『・・・』

ああ思い出した、あの時俺は切ったんだ。最後まで聞かずに、その電話を確かに切った。

耳の奥にはりついた、あの恨めしげな声。ああ、思い出してしまった。

考えすぎかもしれないが・・・薩伊・・・サツイ・・・薩伊って・・・殺意？

ああ、考えすぎだよな、そうだ。考えすぎだ。銃を早く手放そう。早く、このてから引き離して――――・・・。

そう思っていたら俺の喉から、ありえないくらい大きな声で、確かに言葉が発せられた。

「竜子（たつこ）」

遠ざかっていく背中に、振り返らないことを祈った。

けれどもそれはすぐにムダだと知った。

「・・・先輩？」

竜子（たつこ）の口がそう動いている。ああ、違う、呼んじゃいない。俺はお前を殺そうなんてしていない。

銃を上からすっと下ろして、すぐに照準に入った。そして銃口の先は確かに竜子（たつこ）に向いていた。これでは撃ち抜いてしまう。

＞i385517―2852＜

悲しげな顔をする竜子（たつこ）の顔が脳裏に張り付く。そんな顔をするな、撃つ気はないのに。俺は、これは俺じゃないのに。

混乱する意識の中、俺は確かに構えていた。

銃の安全装置も外れていて、指が必死に遊びの部分で抗っていた。このまま引きたくは無い、けれども指はその何十倍の強さで、確実に遊びを縮めていた。

這い上がる悪寒（後書き）

一回これ全部、パーになって書き直しました・・・
あ～、なんかで冒頭が思い出せなかったから不十分な出来。

☆遊び・・・銃を扱ったことのある方はご存知かと思いますが、銃の引き金には、弾が発射されるまでに、遊びという、全く反応しない部分があります。遊びを引き終わると、弾は発射されるわけですね～♪
まあ、これはあくまでもスポーツ射撃の用語解説ですが・・・誤りはごめんなさい。私もプロじゃないので。アマチュア選手なので・・・笑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0173y/

BLACK GAME～精神破壊～

2012年1月6日13時47分発行